

平成 30 年度

日本大学学位請求論文

審美的価値観と絵画の美的評価との関連についての
心理学的検討

日本大学大学院文学研究科

心理学専攻博士後期課程

宮 下 達 哉

目 次

本論文の概要と構成	4
第 1 章 序論	9
1.1. はじめに	9
1.2. 絵画カテゴリ化	13
1.3. 美的評価	14
1.4. 審美的価値観 (aesthetic dimension of value)	16
1.5. 絵画に描かれている内容と美的評価との関連	20
1.6. 個人差要因と美的評価との関連	23
1.7. 本研究の目的	31
第 2 章 審美的価値観と絵画カテゴリ化	34
2.1. 研究 1: 審美的価値観と絵画カテゴリ化との関連	34
2.2. 総合考察	44
第 3 章 審美的価値観は絵画に描かれている内容に左右されず絵画の美的評価と関連する か? 45	45
3.1. 研究 2: 審美的価値観は, 絵画に描かれている内容の美醜に左右されず美的評価と 関連するか?	45
3.2. 研究 3: 審美的価値観は, 絵画に描かれている内容の具象性・抽象性に左右されず 美的評価と関連するか?	67
3.3. 総合考察	78
第 4 章 審美的価値観は絵画の既知性, 美術経験, 開放性に左右されず絵画の美的評価と 関連するか?	79
4.1. 研究 4: 審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価と関連するか? 79	79
4.2. 研究 5: 審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連する か? 88	88
4.3. 研究 6a: 審美的価値観は Big Five の開放性から独立して絵画の美的評価と関連す るか?	106
4.4. 研究 6b: 研究 6a の再現可能性の検討	123
4.5. 総合考察	134
第 5 章 総括	136
5.1. 本論文における実証研究の結果の概要	136
5.2. 本論文の意義と今後の展望	140
5.3. 本論文の限界点	142

本論文の概要と構成

本論文は、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連することを一貫して示した研究である。本論文の全体図を Figure1.1 に示す。

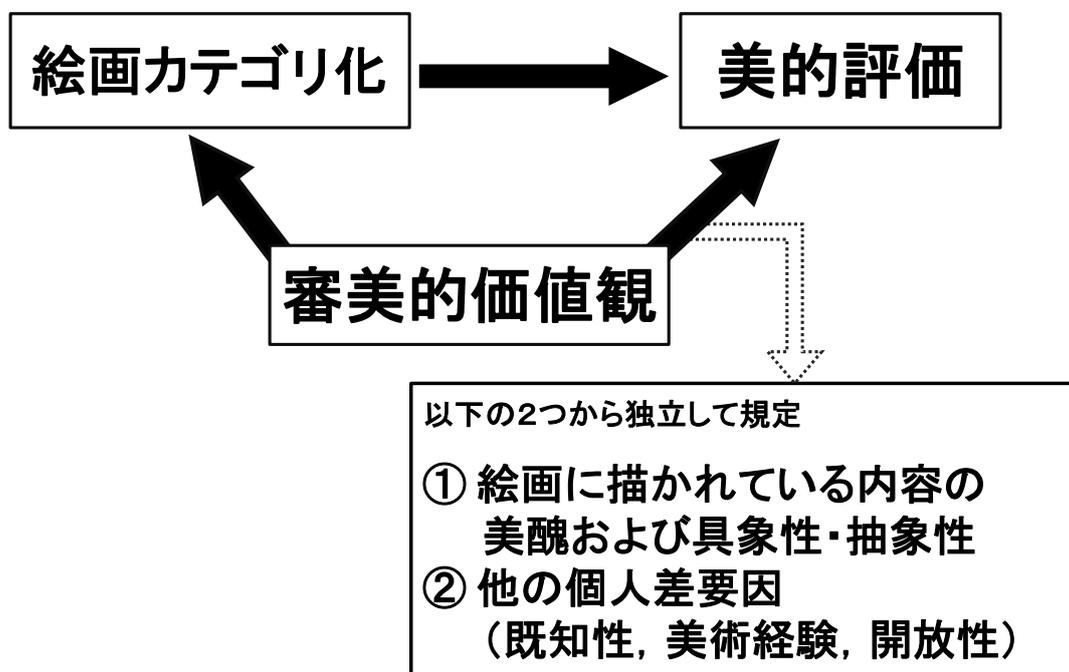


Figure1.1. 本論文の全体図。

第1章は、まず、絵画カテゴリ化、美的評価、審美的価値観に関する用語の定義を行った。次に、絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性と美的評価との関連を説明した。本研究で意味する絵画に描かれている内容とは、美しいものあるいは醜いもの、また、具象画あるいは抽象画を指し、これらに関する

先行研究を紹介した。さらに、個人差要因と美的評価との関連を説明した。個人差要因とは、既知性、美術経験の有無、Big Five の開放性を指し、これらに関する先行研究を紹介した。

第 2 章から第 4 章は、第 1 章で述べた仮説を検証するために行った 7 つの実証研究を紹介した。

第 2 章は、研究 1 から成り立っており、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討した。

研究 1 は、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討した。調査ではモザイク処理を行った 3 枚の絵画（風景画、静物画、人物画）に対して絵画カテゴリ化 (i.e., あなたはそれを絵画だと思いますか?) を測定した後、審美的価値観を測定した ($N = 96$)。その結果、審美的価値観と絵画カテゴリ化との間に有意な正の相関がみられた。

第 3 章は、研究 2 と研究 3 で成り立っており、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象・抽象性に左右されず、絵画の美的評価と関連するかについて検討を行った。具体的には、絵画に描かれている内容として、美しい内容が描かれている絵画および醜い内容が描かれている絵画、具象画および抽象画に着目した。

研究 2 は、絵画に描かれている内容の美醜と美的評価との関連を検討した。

調査では、6枚の絵画（美しい対象が描かれた絵画3枚と醜い対象が描かれた絵画3枚）に対する美的評価を測定した後、審美的価値観を測定した（ $N = 89$ ）。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に描かれている内容が美しいもの及び醜いもののどちらであっても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

研究3は、具象画・抽象画に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討した。調査では、6枚の絵画（抽象画3枚と具象画3枚）に対する美的評価を測定した後、審美的価値観を測定した（ $N = 96$ ）。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、抽象画と具象画どちらに対しても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

第4章は、研究4から研究6bで成り立っており、審美的価値観は他の美的評価を規定する個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討した。具体的には、他の個人差要因として、絵画の既知性、美術経験の有無、Big Fiveの開放性に着目した。

研究4は、審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価を規定するか検討した。処理流暢性理論（Reber, Schwarz, & Winkielamn, 2004）では、呈示された刺激に対する情報処理が流暢に行われるほど、その刺激に対する美的評価が高まるといわれている。この時、美的評価の上昇が刺激に対する親近性に

誤帰属すると考えられている (Bornstein, 1992)。こうした誤帰属によって、単純接触効果が生じるとされる (Bornstein, 1992; Jacoby & Kelley, 1987)。従って、既知性が絵画の美的評価を規定する論拠は、単純接触効果に基づくと考えられる。調査では、6枚の絵画(美しい対象が描かれた絵画3枚と醜い対象が描かれた絵画3枚)に対する美的評価を測定した後、審美的価値観、既知性(i.e., あなたはその絵画を観たことがありますか?)を測定した(N=79)。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、既知性はこれらと関連しなかった。

研究5は、審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。調査では、美大生(N=140)と一般学生(N=96)を対象に、研究2と同様の6枚の絵画(具象画3枚と抽象画3枚)に対して美的評価へ回答を求めた後、審美的価値観を測定した。その結果、美大生と一般学生どちらの群においても、審美的価値観が高い人は低い人よりも抽象画および具象画に対する美的評価が高いことが示された。

研究6aは、審美的価値観は開放性から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。調査では、合計24枚の絵画を刺激として呈示し、これらの絵画に対する美的評価、審美的価値観、開放性を測定した(N=110)。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。

研究6bは、研究6aの再現可能性を検討した。研究6aで対象とした調査参加

者は心理学科の学生のみが対象であったため、心理学科以外の学生も調査対象とすることで、研究 6a の追試調査を行った。調査は、研究 5a の手続きを踏襲し、323 名の調査参加者（内訳は、理工学部の学生 209 名、教育学部の学生 72 名、心理学部の学生 42 名）を対象に行った。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。この結果は、研究 6a の結果を支持するものであり、研究 6a から得られた知見の再現可能性を示唆するものであった。

第 5 章は、研究 1 から研究 6b で得られた知見をまとめて、審美的価値観と絵画の美的評価との関連について総合的に考察をした。また、本論文の意義として、絵画の美的評価における示唆と実際的な意義を述べ、最後に本論文の展望を述べた。

第1章 序論

1.1. はじめに

本論文の出発点として、描かれたものを絵画であると判断することを絵画カテゴリ化と定義し、その上で絵画に対する美的評価について検討を行う。

絵画カテゴリ化が生じた絵画は、それが絵画であるという判断のもと美的評価が行われる。美的評価とは、表現する語彙が異なっても、その根底には共通の快評価があるという概念である (Berlyne, 1974)。

絵画カテゴリ化後の絵画に対して、審美的価値観がこれら絵画に対する美的評価を規定すると本論文では考えた。審美的価値観とは、Spranger (1921) の提唱した6つの普遍的価値観(理論・経済・審美・宗教・社会・権力)の1つであり、美しさを重視する価値観である。

審美的価値観が絵画に対する美的評価を規定するかを実証的に検証するため、本論文は2つの論点から検討する。すなわち、審美的価値観は、①絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず、②他の美的評価を規定する個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討する。

1点目の絵画に描かれている内容とは、描かれているものの美醜、具象性／抽象性を指す。具体的には、絵画に描かれている内容が美しいものあるいは醜いも

のどちらであっても、また、絵画に描かれている内容が具象画あるいは抽象画のどちらであっても、それらの内容の違いに左右されず、審美的価値観は絵画に対する美的評価を規定すると考えられる。

2点目の他の美的評価を規定する個人差要因とは、絵画の既知性、美術経験の有無、Big Fiveの開放性を指す。絵画の既知性について、絵画の既知性が絵画の美的評価を規定する論拠として、単純接触効果が考えられている (Zajonc, 1968)。美術経験の有無とBig Fiveの開放性について、抽象画・具象画に対する美的評価は、これら2つの個人差要因によって関連の様相が異なることが先行研究 (e.g., Cupchik & Gebotys, 1988; Hekkert & van Wieringen, 1996b; Schmidt, McLaughlin, & Leighten, 1989; Swami & Furnham, 2014) より報告されている (Table1.1)。

Table1.1.

美術経験および開放性と抽象画・具象画との関連の様相の違い

		抽象画	具象画
美術経験	有り	美的評価 高い	—
	無し	—	美的評価 高い
開放性	高い	美的評価 高い	—
	低い	—	—

これらのことより、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連することを一貫して示すことが本研究の大目的である。その上で、本論文が検討する具体的な目的は大きく 2 つである。すなわち、①審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象・抽象性に左右されず美的評価と関連するか検討すること、②審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討することである。

1.2. 絵画カテゴリ化

私たちが何か描かれたものを見た時、それを絵画である判断することがある。こうした判断を本研究では、絵画カテゴリ化と定義した。そのため、絵画であると判断する時は絵画カテゴリ化が生じ、一方絵画でないと判断する時は絵画カテゴリ化が生じない。

このように絵画カテゴリ化が生じた絵画は、それが絵画であるという判断のもと美的評価が行われる。

1.3. 美的評価

絵画，彫刻，建築などに対する評価は，様々な言葉が用いられる。例えば，私たちが美術館に行って絵画を鑑賞し感動した時，その絵画に対して「美しい」や「良い」といった言葉などで感動を表現するだろう。

「美しい」や「良い」といったこうした言葉は，Osgood, Suci, & Tannenbaum (1957) が示した評価性 (Evaluation) 因子に含まれるものである。評価性因子は，Osgood et al. (1957) が開発した心理学的測定方法であるセマンティック・ディファレンシャル法 (semantic differential method ; 以下，SD 法) から抽出される基本 3 因子の 1 つである。SD 法では，15 から 30 個ほどの双極性の形容詞対尺度が用いられる。そして，それぞれの尺度で様々な対象 (e.g., 絵画，彫刻，建築) の印象を評価し，得られたデータに対して因子分析が実施され，その対象に対する印象を構成する主要次元が抽出される。さらに，Osgood (1960) は，刺激や文化の違いに関わらず，評価性因子，活動性 (Activity) 因子，力量性 (Potency) 因子の 3 因子が安定して抽出されることを報告している。

評価性因子について，この因子に含まれる代表的な尺度が「良い—悪い」や「快い—不快な」であると指摘されており (和田・續木・山口・木村・山田・野口・大山，2003)，また，「美しさ」，「快さ」，「好ましさ」などが一般的に取り上げら

れることが多いといわれている（筒井・近江，2010）。

Berlyne（1974）は，Osgood et al.（1957）の評価性因子に対応する概念としてヘドニックトーン（Hedonic tones；以下，HT）を提唱している。すなわち，HTとは，表現する語彙が異なってもその根底には共通の快評価があることを指す。なお，HTに含まれる主要な評価語としては，「美しさ」，「快さ」，「良さ」，「好ましさ」の4つの形容詞が一般的に用いられやすいとされる（筒井・近江，2009）。

また，Shcherer（1987）は，言葉による評価及び評定は潜在的な過程の表れたものだと指摘している。特に，この潜在的な過程とは，快感情が誘発されている状態をさす。例えば，快感情が誘発されている状態は，美術館で絵画を鑑賞し，そして感動している状態のことなどが挙げられる。従って，快感情が誘発されている状態は，言語化以前のプリミティブな段階であるといえる。こうした Shcherer（1987）の指摘からも，「美しい」や「良い」といった対象に対する評価語は，その根底に快評価があると考えられる。

これらのことを踏まえると，美的評価（aesthetic evaluation）は，HTに基づいた快・不快次元の評価を基盤とすると考えられる。すなわち，美的評価は，快感情が誘発された状態を，「美しい」や「快い」といったように，様々な言葉を用いて評価することである。

1.4. 審美的価値観 (aesthetic dimension of value)

何を重視するかという価値観は、個人個人によって多様に形成される考え方の一つである。価値観とは、個人の行動の根底に存在するものであり (Schwartz, 1992), 重要な判断をする際の普遍的な基準となるものである (Kluckhohn, 1951; 李, 2008)。そして、価値観とは、他者から与えられるものではなく、自己の内面に形成されていくものだと考えられる。

価値観の中でも、Spranger (1921) の古典的価値理論は、普遍的価値観として理論的価値観・経済的価値観・審美的価値観・宗教的価値観・社会的価値観・権力的価値観の6つの価値観があるとしている。これら6つの普遍的価値観は、その個人の全行動の中心原理と考えられている。その内の一つである審美的価値観は、美を重視する価値観であり、芸術的活動に情熱を傾けることへ作用するといわれている (Spranger, 1921)。従って、審美的価値観を重視する人は、美しいかどうかという判断基準のもと、芸術に対する評価を行っていると考えられる。

酒井 (2001) は、審美的価値観を最も端的に表している概念は“芸術的活動に興味関心をもつ”ことであると報告している。酒井 (2001) の研究は、まず、大学生5名に対し、『文化と性格の諸類型』(Spranger, 1921 伊勢田訳, 1961)を

熟読させ、審美的価値観を測定するのに適切と思われる計 10 項目（5 名×2 項目）を選定した¹。次に、大学生 258 名を対象に行った調査にて、これら 10 項目と審美的価値観を測定できる価値志向的精神作用尺度（酒井・久野，1997）との相関係数を算出した結果、審美的価値観と最も相関が強い項目は“芸術的活動に興味関心をもつ”であったと指摘をしている（ $r = .64$ ）（Table 1.1.2）。これらのことより、審美的価値観の高い人は、芸術的活動に興味をもつと考えられる。

¹ 酒井（2001）の研究は、Spranger（1921）の 6 つの普遍的価値観を測定するために適切と思われる計 60 項目（6 価値×5 名×2 項目）を選定し、これら 60 項目と価値志向的精神作用尺度（酒井・久野，1997）との相関係数を算出している。

Table 1.1.2

大学生 5 名が作成した審美的価値観に関する 10 項目と価値志向的精神作用尺度（酒井・久野，1997）との相関係数（ $N = 258$ ）

項目内容	「価値志向的精神作用尺度」 との相関係数
1. 芸術的活動に興味関心をもつ。	.64**
2. 美しいものに我を忘れてひたることができる。	.50**
3. コンサートやライブを聴きに行くことが好きである。	.42**
4. 感動的なことがあったとき、それを絵や文章、音楽などで表したいと思う。	.37**
5. 何かに見とれることがよくある。	.37**
6. 他人のファッションが気になる。	.34**
7. 周囲の事象や自然に感情移入することがある。	.31**
8. 街中に、彫刻などのオブジェを置くのは意味のあることだと思う。	.28**
9. ドラマや小説の登場人物になりきってしまうことがある方だ。	.05
10. 現実を想像の力で美化して見ることがある。	.02

さらに、酒井・Yanagida・松居・戸田（2018）は、Spranger（1921）の審美的価値観について下位類型が存在することを指摘している。例えば、審美的価値観を重視する人であっても、一般に創作は鑑賞よりも困難であり、鑑賞はするが創作には至らない者も存在するとされる。そのため、芸術の創作と鑑賞との関係は、鑑賞が先で創作が後というように、順序関係であると酒井他（2018）は指摘している。

これらのことを踏まえると、審美的価値観を端的に表している概念は、芸術的活動に興味関心を抱くことであり、特に芸術的活動は芸術の鑑賞を意味するといえる。従って、審美的価値観は芸術の鑑賞を規定すると考えられる。

1.5. 絵画に描かれている内容と美的評価との関連

1.5.1. 絵画に描かれている内容——美しさと醜さ——

絵画に描かれている物理的特徴によって、絵画に対する美的評価は大きく異なってくる。例えば、Uusitalo, Simola, & Kuisma (2012) は、具象画を見た時の視線行動は短時間で広範に及ぶと指摘している。すなわち、Uusitalo et al. (2012) の指摘を踏まえると、具象画はそこに描かれている内容が理解しやすく、視線行動が流暢であるといえる。このように視線行動が流暢であれば、知覚的流暢性が高いと考えられる。知覚的流暢性とは、刺激の物理的な特徴に対する処理効率と定義される (Reber et al., 2004)²。知覚的流暢性が高ければ親近性が生じ、その親近性が刺激への評価を高めることが先行研究 (Jacoby & Kelly, 1987) から示されている。

Uusitalo et al. (2012) の指摘を踏まえると、筒井他 (2009) の研究で用いられている 3 点のリアリズム絵画は、一見して何が描かれているか分かりやすいため、知覚的流暢性の高い具象画だと考えられる。そのため、これらのリアリズム絵画は、実験材料である絵画の種類自体によって美的評価が総じて高くなりやすい可能性がある。そこで本研究では、筒井他 (2009) の実験で用いられた絵画

² 処理流暢性理論に基づいた美的評価に関する研究では、知覚的流暢性を操作したものが多く見られる (Reber et al., 2004; Winkielman & Cacioppo, 2001)。

を「美しい対象が描かれた絵画」と定義し、これと対になる「醜い対象が描かれた絵画」も評価対象とすることとした。本研究の目的は、絵画それ自体の美について議論することではなく、絵画に描かれている内容が美しいものあるいは醜いもののどちらであっても、審美的価値観が絵画の美的評価と関連することを検討することである。そのため、「醜い対象が描かれた絵画」も刺激として用いることにより、描かれている内容の美醜によって美的評価が大きく左右されることを防止した。

1.5.2. 絵画に描かれている内容——具象性と抽象性——

作品の写実性と美的評価との関連に着目した先行研究は、これまで多く行われてきたと指摘されている (Hekkert & Wieringen, 1990)。Hekkert & Wieringen (1990) の指摘に基づき、筒井・近江 (2010) は、絵画の写実性あるいは具象性を操作しており、写実的あるいは具象的な作品は一様に選好されると結論づけている (筒井・近江, 2010)。

作品の写実性と美的評価との関連に着目した先行研究の 1 つとして、Hekkert & van Wieringen (1996b) は、後期印象主義の絵画を刺激として用い、絵画の具象性・抽象性について検討している。研究の結果、美術経験のある者は、抽象化された絵画よりも具象絵画を好むことが示された。

この非専門家における具象絵画の選好においても、処理流暢性理論（Reber et al., 2004）と対応するものと指摘されている（筒井・近江，2010）。処理流暢性理論では、呈示された刺激に対する情報処理が流暢に行われるほど、その刺激に対する美的評価が高まるを仮定する（Reber et al., 2004; Winkielman & Cacioppo, 2001）。従って、具象性に伴う意味の把握の容易さが、これらの選好と関連すると推測される。

1.6. 個人差要因と美的評価との関連

絵画を評価する際、ある人はピカソの抽象画が好きかもしれなし、ある人はクラーナハの具象画が好きかもしれない。こういった場合、絵画の配色や形態によって美的評価が高まるのか、それとも作品に込められた意味を読み取ることによって美的評価が高まるかは個人によって異なるだろう。本節では、絵画に対する美的評価を規定する個人差に着目する。具体的には、既知性、美術経験の有無、パーソナリティ特性の1つである Big Five の開放性について注目していく。

1.6.1. 既知性と美的評価

テレビ、雑誌、美術館などである絵画を繰り返し観ることにより、「その絵を知っている」という経験が、絵画に対する評価を高めることがあるだろう。このように、ある対象に対する反復接触がその対象への好意度を高める現象のことを、単純接触効果 (mere exposure effect) という (Zajonc, 1968)。

単純接触効果が生じる原因の1つに、知覚的流暢性の誤帰属説がある (Bornstein & D'Agostino, 1992; Jacoby & Kelly, 1987)。Reber et al. (2004)によれば、呈示された刺激に対する情報処理が流暢に行われるほど、その刺激に対する美的評価が高まることが報告されている。知覚的流暢性の誤帰属説とは、刺激へ

の単純接触がその刺激の処理を流暢にし、後にその刺激が呈示された際、その流暢性が刺激に対する評価と誤って帰属されるために好意的評価の高まりが生じるとする説である (Bornstein & D'Agostino, 1992)。すなわち、誤帰属によって単純接触効果が生じることを意味する。

これらのことより、ある絵画に反復して接触することが、その絵画を知っているという既知性 (familiarity) を生じさせるといえる。従って、既知性が絵画に対する美的評価を規定すると考えられる。

1.6.2. 美術経験の有無と美的評価

造形教室に通っていた、美術大学で学んだことがあるなど、こうした美術経験は絵画の認知に強く影響すると言われている。井上・穂積・玉川・五十殿 (2005) は、専門的な美術教育を受けた経験の有無は、美術作品の鑑賞構造に最も強く影響する要因であると指摘している。例えば、美術経験のある者は美術作品の構造的側面を鑑賞することを楽しむのに対し、美術経験のない者はこうした側面を楽しむことはほとんどないと指摘されている (Augustin & Leder, 2006)。

絵画に対する美的評価について、抽象画および具象画に対する美的評価は、美術経験によって関連の様相が異なることが先行研究より報告されている。例え

ば、Hekkert & van Wieringen (1996b) の研究は、美術経験のない者は抽象的な絵画よりも具象的な絵画を好む傾向があることを示している。こうした美術経験と抽象画および具象画に対する美的評価との関連の理由として、素人は理解しやすいものを見ることを好む一方で、専門家は構造や抽象的な特徴に注目するといったことや (Schmidt, McLaughlin, & Leighten, 1989), 専門的知識を持たない者はそうでない者に比べて写実的な絵画を好む (Cupchik & Gebotys, 1988) といった理由がこれまでの研究から指摘されている。このように抽象画および具象画に対する美的評価は、美術経験の有無によって関連の様相が異なるという点が先行研究から指摘されてきた。

1.6.3. Big Five の開放性と美的評価

近年において、美学研究を個人差の観点から捉える最も主要なものとして、パーソナリティ特性の Big Five が注目されている。Big Five とは、パーソナリティ全体を理解する上で必要となる特性として、情緒不安定性 (Neuroticism), 外向性 (Extraversion), 開放性 (Openness), 調和性 (Agreeableness), 誠実性 (Conscientiousness) の 5 つの基本的特性次元から捉えようとするモデルのことを指す。Big Five 特性は、過去 75 年以上にわたるパーソナリティ研究において

注目されてきたが (Costa & McCrea, 1992), 個性記述的な観点から美学研究を検討する際に最も主要なパーソナリティ特性として認識されている (Costa & McCrea, 1992; Goldberg, 1993)。

1990年代以降, Big Five と視覚芸術に対する美的評価との関係について, 主に絵画評定という観点から研究がなされてきた。その代表的な先行研究の知見を Table1.6.1 に示す。

Table 1.6.1

Big Fiveの開放性と美的評価との関係についての代表的な先行研究

引用文献	Big Fiveの次元	対象とした芸術	属性	参加者人数	分析	統計値
Chamorro-Premuzic, Burke, Hsu, & Swami (2010)	開放性	絵画	成人	3254名	共分散構造分析	パス係数 = .76
Chamorro-Premuzic, Reimar, Hsu, & Ahmetoglu (2009)	開放性	絵画	成人	91692名	共分散構造分析	パス係数 = .67
Swami, Malpass, Havard, Benford, Costescu, Soffitiki, & Taylor (2013)	開放性	音楽	18歳から57歳までの成人	414名	重回帰分析	$\beta = .25$

こうした先行研究の多くは、美的評価として「好み (preference)」を評価語として用い、開放性と視覚芸術に対する好みとの間に安定して正の相関が示される点を見出している (Chamorro-Premuzic, Burke, Hsu, & Swami, 2010; Chamorro-Premuzic & Furnham, 2004; Chamorro-Premuzic, Reimar, Hsu, & Ahmetoglu, 2009; Feist & Brady, 2004; Furnham & Avison, 1997; Furnham & Chamorro-Premuzic, 2004; Furnham & Walker, 2001a, 2001b; Rawlings, 2000; Rawlings, Twomey, Burns, & Morris, 1998)。開放性は創造性と関連する構成要素を担っていると考えられていることから (Leutner, Yearsley, Codreanu, Borenstein, & Ahmetoglu, 2017), 創造的活動の一つである芸術作品の評価と強い関連性を示したと考えられる。

一方、開放性以外の Big Five 特性と視覚芸術に対する美的評価との関連も見出されている。例えば、外向性において、外向的な人は多色、複雑、印象主義 (impressionistic)、表現主義 (expressionistic) といった特徴をもつ絵画を好む一方で、内向的な人は色味の少ない、シンプル、左右対称、現実主義 (realistic) といった特徴をもつ絵画を好むことが報告されている (Eysenck, 1940)。勤勉性と協調性においては、どちらも具象絵画の好みと正の相関がある一方で (Furnham & Walker, 2001a)、抽象絵画とは負の相関があることが報告されている (Furnham & Avison, 1997; Furnham & Rao, 2002)。神経症傾向においては、抽象絵画の好みとの関連が報告されている (Furnham & Walker, 2001b)。

しかしながら、これら開放性以外の Big Five 特性は、開放性との関連ほど強固な結びつきは示されていない (Chamorro-Premuzic et al., 2010)。従って、Big Five の中でも特に開放性が、芸術作品に対する美的評価と最も強固に関連するパーソナリティ特性であることが示されている。

Big Five の開放性において、絵画以外の芸術作品との関連を検討した研究もある。例えば、Swami, Malpass, Havard, Benford, Costescu, Sofitiki, & Taylor (2013) は開放性と音楽との関連を検討しており、開放性の高い人はヘヴィ・メタルのような激しい音楽を好むことを示している。また、Swami, Stieger, Pietschnig & Voracek (2010) は開放性と映画との関連を検討しており、開放性の高い人はシュールレアリスムの映画のフィルムクリップ³を好むことを示している。本・雑誌については、開放性の高さは読書から得られる喜びと正の相関を示し (Finn, 1997)、また複雑で刺激的なジャンルの文学作品への好みとも正の相関を示している (Kraaykamp & Van Eijck, 2005)。

しかしながら、これらを刺激対象とする問題点として、美的評価の測定における水準が研究者間で一致していないことが指摘されている (Rentfrow & Gosling, 2003)。そのため、絵画を刺激とした時ほど結果が安定していないと考えられる。これらのことから、開放性と芸術作品に対する美的評価との関連は、芸術作品と

³ フィルムクリップとは、映画の中から象徴的あるいは効果的な一場面を抜き出して、宣伝・広告などに使えるようにしたものである。

して絵画を用いた時に安定して正の相関が示されることが先行研究より明らかになった点であった。

絵画における美的評価と開放性との関連において、開放性は特に絵画の抽象・具象性に対する美的評価との関連の様相が異なると指摘されている。すなわち、開放性は具象画に比べて抽象画と強く関連することが示されている（Chamorro-Premuzic et al., 2009; Furnham & Avison, 1997）。例えば、開放性は印象派の描いた具象画に対する好みと関連を示さないことが報告されている（Chamorro-Premuzic et al., 2009）。また、開放性は抽象画に対する好みと関連することや（Swami & Rawlings, 2012）、具象作品などの絵画よりも抽象作品といった絵画と強く関連すること（Swami & Furnham, 2014）が指摘されている。従って、美術経験の有無と同様に、抽象画および具象画に対する美的評価は、開放性によって関連の様相が異なるという点が先行研究より示された点であった。

1.7. 本研究の目的

1.7.1. 目的

審美的価値観は、美を重視する価値観であり (Spranger, 1921), かつ, 重要な判断をする際の普遍的な基準となること (Kluckhohn, 1951 ; 李, 2008) について先行研究に基づき論じた。これらのことより, 審美的価値観を重視する人にとって, 美しいかどうかという判断基準がその人の行動で最も重視されると考えられる。

審美的価値観を重視する者は, 美しいかどうかという判断基準に基づき, 視覚対象を絵画である判断する。すなわち, 審美的価値観の高い者は, 一見して絵画であると判断しにくいものであっても, 絵画カテゴリ化された絵画であれば美的評価が高くなると考えられる。さらに, 審美的価値観の高い者は絵画カテゴリ化された絵画を美しいものだと判断するため, 絵画に描かれている内容の美醜および具象・抽象性に関わらず, また, 審美的価値観以外の個人差要因に左右されず, 絵画に対する美的評価が高くなると考えられる。

以上のことより, 本研究は絵画カテゴリ化された絵画に対して審美的価値観が絵画に対する美的評価を規定するかを実証的に検証するため, 主に 2 つの方法を用いて検討する。すなわち, 審美的価値観は, ①絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず, また, ②他の美的評価を規定する個人

差要因に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討することを目的とする。

具体的に、①では、2つの研究によって審美的価値観は絵画に対する美的評価を規定するか検討する。研究2は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美しさおよび醜さに左右されず、絵画に対する美的評価と関連するか検討する。また、研究3は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の具象性および抽象性に左右されず、絵画に対する美的評価と関連するか検討する。これら2つの研究から、審美的価値観は絵画に描かれている内容に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討することを目的とする。

②では、4つの研究によって審美的価値観は絵画に対する美的評価を規定するか検討する。研究4は、審美的価値観は絵画の既知性に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討する。研究5は、審美的価値観は美術経験の有無に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討する。研究6aおよび6bは、審美的価値観はBig Fiveの開放性から独立して、絵画に対する美的評価を規定するか検討する。これら4つの研究から、審美的価値観はその他の個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討することを目的とする。

1.7.2. 検証の方法

本研究で行った実証研究は、全て授業時間内に行った一斉調査形式であった。調査は、以下の3つの構成で実施した。すなわち、初めに絵画に対する美的評価を測定し、次に Big Five の開放性の測定、最後に審美的価値観の測定であった。なお、Big Five の開放性の測定は、研究 6a および 6b のみで測定をおこなった。

絵画に対する美的評価について、絵画は教室の大型スクリーンに1枚ずつ呈示し、それらに対する美的評価を測定した。絵画に対する美的評価の測定が終了の確認した後、Big Five の開放性の測定、次いで審美的価値観の測定という順序であった。

第2章 審美的価値観と絵画カテゴリ化

2.1. 研究1：審美的価値観と絵画カテゴリ化との関連

2.1.1. 目的

研究1の目的は、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討することであった。

私たちが視覚対象を見た時、それを絵画であると判断する。本研究ではこうした判断を絵画カテゴリ化と定義した。そのため、絵画であると判断したものは絵画カテゴリ化が生じ、一方、絵画でないと判断したものは絵画カテゴリ化が生じないと考えられる。

こうして絵画カテゴリ化されたものは、それが絵画であるという判断のもと美的評価が行われる。この時、美的評価と関連するものが、審美的価値観であると考えられる。すなわち、審美的価値観は絵画カテゴリ化された絵画の美的評価の高低を左右すると考えられる。

そこで本研究では、絵画カテゴリ化を検討する上で、モザイク処理を行った絵画を使用した。具体的には、筒井他（2009）で使用された風景画、静物画、人物画の3枚の絵画に対してモザイク処理を行った。

結果の予測としては、審美的価値観の高い者は、モザイク処理された絵画の刺

激画像に対する絵画カテゴリ化の得点を高く評価すると考える。

2.1.2. 方法

参加者 大学生 96 名（男性 60 名，女性 36 名，平均年齢 20.07 歳， $SD = 0.92$ 歳）が調査に参加した。

刺激 筒井他（2009）で用いられた美しい対象が描かれた絵画 3 種の計 3 種を刺激として用いた（Figure 2.1.1）。これらの絵画は，筒井ら（2009）の実験手続きを踏襲してモザイク処理をしたものであった。具体的には，各絵画のオリジナルの画像に対し，40 平方ピクセルの正方形に分割した処理を行った。



Figure 2.1.1. 筒井他（2009）の研究で用いられた風景画，静物画，人物画の3点の絵画をモザイク処理したもの。

尺度 絵画カテゴリ化を測定する尺度と、審美的価値観を測定する尺度を同一の冊子に綴じた質問紙を用いた。なお、前半に絵画カテゴリ化、後半に審美的価値観を測定した。

絵画カテゴリ化を測定する尺度には、“あなたはあの画像を絵画だと思うかどうか、9段階で評価してください”という質問に対して、両極型の9段階評価（「絵画だと思わない」：1点－「絵画だと思う」：9点）で回答を求めた。

審美的価値観を測定する質問紙尺度は、酒井・山口・久野（1998）の価値志向性尺度を用いた。この尺度は6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中で、「審美」を測定する12項目を本研究で用いた。その12項目をTable 2.1.1.に示す。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。

価値志向性尺度（酒井他，1998）の質問項目は、心理測定尺度集Ⅱ（久保田，2002）より引用した。ただし、当尺度集では全72項目の質問項目が6つの価値ごとに記載されていたため、実験者がランダムに質問項目の順序を入れ替え、それを質問紙冊子に印刷して用いた。回答方法は、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法であった。

Table 2.1.1.

価値志向性尺度（酒井他，1998）における審美的価値観の質問項目

質問項目	
審美	<ol style="list-style-type: none"> 1. 印象的なことに出会うと、それを文章や絵、音楽などで表わしたくなる。 2. 物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える。 3. 身の回りの道具などに、生きものに対するような親しみを感じることもある。 4. 身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある。 5. 自分がきれいだと思うものを、集めたり飾ったりする。 6. 自分の気持ちや感じにぴったりくる言葉を見つけようとする。 7. 気に入った絵や写真などを、時間の経つのも忘れて眺めていることがある。 8. 芸術的なものには、あまり興味がない。R 9. 何かに見とれることがよくある。 10. 美しい景色などを見ても、すぐに飽きてしまう方だ。R 11. 気に入った小説や映画の世界の中に入り込んで、想像を巡らせている時がある。 12. 自分の好きな音楽の流れの中にひたっていると、とても気分が良くなる。

R:逆転項目

手続き 調査は、一斉調査形式で行った。回答方法は、絵画を大型スクリーンに1枚ずつ呈示し、絵画カテゴリ化を測定する尺度に対する回答を求めた。その後、価値志向性尺度への回答を求めた。

2.1.3. 結果

静物画、人物画、風景画のそれぞれに対する絵画カテゴリ化の得点と、価値志向性尺度の審美的価値観の合計得点の平均を算出した (Table2.1.2.)。

Table2.1.2.

諸変数の合計得点の平均値 (N = 96)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
審美的価値観	42.16	8.51
静物画	3.50	2.57
人物画	2.41	1.79
風景画	3.77	1.88

次に、諸変数の相関係数（ピアソンの積率相関係数）を算出した。その結果、諸変数間にはいずれも 1%水準で有意な相関がみられた（Table2.1.3.）。

Table2.1.3.

諸変数間の相関係数 (N = 96)

	1	2	3	4
1 審美的価値観	—	.619**	.482**	.620**
2 静物画		—	.465**	.375**
3 人物画			—	.588**
4 風景画				—

** : $p < .01$

2.1.4. 考察

研究 1 の目的は、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討することであった。

相関分析の結果、審美的価値観の高い者はモザイク画に対する絵画カテゴリ化の得点も高いことが示され、結果の予測を支持する結果となった。この結果より、審美的価値観の高い者は、モザイク処理された画像に対しても、それを絵画と判断することが示された。従って、本研究は、審美的価値観の高い者は一見して絵画と判断できない視覚的対象に対しても、それを絵画であると判断することを示唆したといえよう。

本研究より、描かれたものを絵画であると判断する絵画カテゴリ化と審美的価値観とが関連することが示唆された。本研究の結果を踏まえると、絵画カテゴリ化が生じた絵画において、それが絵画であるという判断のもと美的評価が行われると推察される。従って、絵画カテゴリ化された絵画に対して、それらの美的評価の高低を左右するものが審美的価値観であるといえる。

2.2. 総合考察

第2章では、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討した。

研究1より、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討することであった。描かれたものを絵画であると判断する絵画カテゴリ化について、審美的価値観が高くなるにつれて、絵画カテゴリ化の得点も高くなることが示された。この結果より、絵画カテゴリ化が生じた絵画において、それが絵画であるという判断のもと美的評価が行われ、さらに、それらの美的評価の高低を左右するものが審美的価値観であることが示唆された。

第3章 審美的価値観は絵画に描かれている内容に左右されず絵画の美的評価と関連するか？

3.1. 研究2：審美的価値観は、絵画に描かれている内容の美醜に左右されず美的評価と関連するか？⁴

3.1.1. 目的

研究2の目的は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美しさおよび醜さに左右されず絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

審美的価値観と絵画の美的評価との関連を検討するにあたり、筒井他(2009)の研究を出発点とした。筒井他(2009)の研究は、絵画を刺激としてヘドニックトーン(Hedonic Tone；以下、HT)の評定語間の関係性を検討した。HTの評定尺度は、“醜い-美しい”、“不快な-快い”、“悪い-良い”、“嫌いな-好きな”の4つの形容詞対であった。各尺度に対する評定値について主成分分析を行った結果、4

⁴ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。宮下 達哉・木村 敦・岡 隆(2016a)．審美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討——ヘドニックトーンと認知的美の評価に着目して——，デザイン学研究，63(2)，25-32．宮下 達哉・木村 敦・岡 隆(2015)．美的評価におけるヘドニックトーンと認知的美の検討——審美的価値観に注目した場合——，日本心理学会第79回大会発表論文集，616．

つの HT 尺度の中でもとくに「良さ」と「好ましさ」は個人差の影響を受けやすく、かつ一意性の低い評価であることが示された。

同様に美しさ、快さ、好ましさの3つの形容詞を用いて HT を検討した筒井・近江 (2010) においても、好ましさは美しさと快さに比べて多次元的かつ個人差を含む評価であることが示されている。これらの知見は美術・デザイン作品の好悪には個人差があるという近江 (1986) の指摘とも一致し、HT 内に個人差の小さい項目と個人差の大きい項目があることが示唆される。

そこで本研究は、鑑賞者の審美的価値観と絵画の美的評価における個人差の大きい項目である良さ、好ましさとの関連を検討することを目的とした。また本研究では、絵画の種類も要因として加えた。すなわち、審美的価値観 (2: 低群, 高群) × 絵画モチーフの美醜 (2: 醜, 美) が美的評価に与える影響についても検討することとした。これにより、美しい対象が描かれた絵画および醜い対象が描かれた絵画に対する美的評価は、審美的価値観によって差異がみられるものと予測される。結果の予測としては、審美的価値観の高い者は低い人よりも、美醜どちらの対象が描かれた絵画に対しても、絵画の美的評価が高くなると考える。

3.1.2. 方法

予備調査 醜い対象が描かれた絵画の選定を行うことを目的とした。また、美しい対象が描かれた絵画が、醜い対象が描かれた絵画よりも美的評価値が高くなるかも同時に検討した。

参加者 大学生 13 名（男性 8 名，女性 5 名，平均年齢 21.31 歳， $SD=2.02$ 歳）が調査に参加した。参加者には実験者が個人的に実験協力を要請した。無報酬であった。

刺激 実験者が選定した醜い対象が描かれた絵画 12 種（Figure 3.1.1）と筒井他（2009）で用いられた美しい対象が描かれた絵画 3 種（Figure 3.1.2-1）の計 15 種を刺激として用いた。醜い対象が描かれた絵画の内訳としては、風景画 4 種，静物画 4 種，人物画 4 種であった。なお，色彩の評価と絵画の時代性に関連があること（岡田・井上，1991），ピカソ，ゴッホ，ルノアール，セザンヌといった近代絵画の巨匠とされる画家の作品は一般的に好まれること（村山，1988）などを踏まえ，醜い対象が描かれた絵画は同一の作者および時代の作品とならないように実験者が選出した。



(A) 風景画



(A) 静物画



(A) 人物画



(B) 風景画



(B) 静物画



(B) 人物画



(C) 風景画



(C) 静物画



(C) 人物画



(D) 風景画



(D) 静物画



(D) 人物画

Figure 3.1.1 予備調査で使用した醜い対象が描かれた絵画 12 点。

手続き 調査概要を簡潔に説明した後、調査冊子を配付した。その後、質問紙への回答方法を教示した。回答はそれぞれの絵画につき、4つの形容詞対尺度(美しさ、快さ、良さ、好ましさ)について両極型の9段階評定(1点-9点)で回答を求めた。所要時間は教示も含め15分程度であった。

結果と考察 まず、絵画に対する美的評価を測定した4項目(美しさ、快さ、良さ、好ましさ)について、計15枚の絵画ごとに形容詞の合計得点を算出した。次に、4項目の得点に一貫性があるかを検討するため、信頼性係数 α を算出した。 α 係数の結果をTable3.1.1に示す。

Table 3.1.1.

計 15 枚の絵画に対する 4 つの形容詞の α 係数 ($N = 13$)

	醜い対象が 描かれた絵画		美しい対象が 描かれた絵画	
		α 係数		α 係数
風景画	A	.81	.85	
	B	.72		
	C	.89		
	D	.68		
静物画	A	.94	.86	
	B	.94		
	C	.88		
	D	.87		
人物画	A	.79	.72	
	B	.58		
	C	.92		
	D	.74		

次に、15 種の各絵画について、4 つの形容詞対尺度の評定値を合計し、その平均値と標準偏差を算出した。その結果、平均値が風景画、静物画、人物画ごとに最も低かった絵画を醜い対象が描かれた絵画として選定した。Table 3.1.1 に、美醜の対象が描かれた絵画それぞれの平均値と標準偏差を、風景画、静物画、人物画ごとに示す。また Figure 3.1.2-2 に、予備調査の結果選定された醜い対象が描

かれた絵画の画像を示す。

美醜の対象が描かれたそれぞれの絵画の評価に差があるか調べるため、醜い対象が描かれた絵画 (Figure 3.1.2-2) と美しい対象が描かれた絵画 (Figure 3.1.2-1) の評定値に対して対応のある t 検定を行った。その結果、風景画、静物画、人物画いずれにおいても、醜い対象が描かれた絵画に比べ美しい対象が描かれた絵画の評定が有意に高いことが示された (風景画は $t(12)=4.40, p<.001, r=.79$; 静物画は $t(12)=5.61, p<.001, r=.85$; 人物画は $t(12)=5.47, p<.001, r=.84$)。

そこで、これらの絵画を「醜い対象が描かれた絵画」とみなして本実験で使用した。

Table 3.1.2.

4つの形容詞対尺度の合計得点の平均値 ($N=13$)

	醜い対象が 描かれた絵画	美しい対象が 描かれた絵画	t 値
風景画	17.15(6.22)	27.77(5.61)	4.40**
静物画	14.17(5.70)	25.92(5.45)	5.61**
人物画	15.08(5.02)	23.83(5.18)	5.47**

注： () 内は標準偏差, ** : $p<.01$

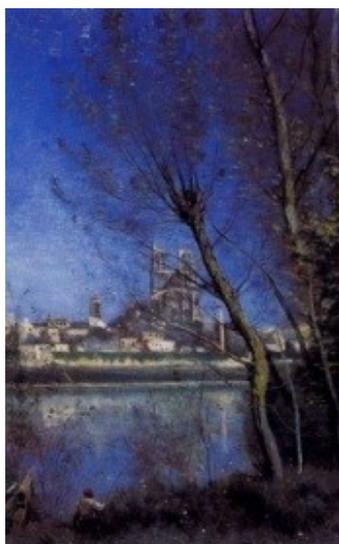


Figure 3.1.2-1 筒井他（2009）の研究で用いられた風景画，静物画，人物画の3点の美しい対象が描かれた絵画。



Figure 3.1.2-2 予備調査で選定を行った結果の風景画，静物画，人物画の3点の醜い対象が描かれた絵画。

本実験 審美的価値観を重視する群を高群、そうでない群を低群とし、両群間の絵画に対する美的評価を群間で比較した。結果の予測としては、審美的価値観の高い者は低い人よりも、美醜どちらの対象が描かれた絵画に対しても、絵画の美的評価が高くなると考える。

実験計画 審美的価値観（2：低群，高群）×絵画（2：醜，美）を独立変数とする2要因混合計画であった。従属変数である美的評価を測定する項目は、「良さ」と「好ましさ」の2項目であった。

実験参加者 大学生90名が実験に参加し、そのうち、欠損値のない89名（男性69名，女性20名，平均年齢20.34歳， $SD = 1.60$ 歳）を分析対象とした。

刺激 美しい対象が描かれた絵画3点（Figure 3.1.2-1）と醜い対象が描かれた絵画3点（Figure 3.1.2-2）の計6点の絵画を刺激として用いた。

尺度 絵画に対する美的評価を測定する尺度と、審美的価値観を測定する尺度を同一の冊子に綴じた質問紙を用いた。なお、前半に絵画に対する評定、後半に審美的価値観を測定した。

絵画に対する美的評価を測定する尺度には、筒井他（2009）のHT尺度を用いた。すなわち，“醜い-美しい”，“不快な-快い”，“悪い-良い”，“嫌いな-好きな”の4種の形容詞対について、両極型の9段階評定（左側：1点－右側：9点）で回答させた。また、過去に美術の経験・学習があったかどうかを測定するため、

“あなたは過去に、美術の専門的な教育を受けたことがありますか？”という質問に2件法（はい・いいえ）で回答させた。

審美的価値観を測定する質問紙尺度は、酒井他（1998）の価値志向性尺度を用いた。この尺度は6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中で、「審美」を測定する12項目を本研究で用いた。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法であった。

手続き 調査は、授業時間内を利用した一斉調査形式で行った。回答の順番は、まず絵画の評定を一斉に実施した後で、価値志向性尺度への回答を求めた。絵画は教室の大型スクリーンに1枚ずつ呈示し、質問紙の評定尺度へ回答を求めた。絵画の呈示順序は風景画、静物画、人物画の順番で行い、3種類の絵画それぞれを美しい対象が描かれた絵画の次に醜い対象が描かれた絵画の順で呈示することによってカウンターバランスをとった。参加者全員が絵画評定を終えたことを確認した後、価値志向性尺度への回答を求めた。全ての回答を終えた時点で各自に質問紙冊子を提出させた。所要時間は教示も含めて約25分であった。

3.1.3. 結果

醜い対象が描かれた絵画及び美しい対象が描かれた絵画において、全刺激（風景画，静物画，人物画）に対する各尺度の合計得点の平均値と標準偏差を算出した。結果を Table 3.1.2 に示す。

Table 3.1.2.

醜美の絵画それぞれにおける，全刺激（風景画，静物画，人物画）に対する
各尺度の合計得点の平均値（ $N = 89$ ）

		<i>M</i>	<i>SD</i>
醜い対象が 描かれた絵画	美しさ	13.47	3.02
	快さ	12.48	3.06
	良さ	13.89	3.77
	好ましさ	13.84	3.83
美しい対象が 描かれた絵画	美しさ	19.02	3.21
	快さ	17.70	3.35
	良さ	18.61	3.75
	好ましさ	17.89	3.69

形容詞対尺度の因子構造を確認するために全データを用いて因子分析（主因子法，プロマックス回転）を実施した。なお，因子数は2因子に設定した。その結果，第1因子は美しさおよび快さが高い因子負荷量を示し，第2因子は良さおよび好ましさが高い因子負荷量を示した（Table 3.1.3）。

Table 3.1.3.

各因子を構成する形容詞対尺度と因子負荷量 (N = 89)

	第1因子	第2因子	共通性
美しさ	.95	-.03	.85
快さ	.63	.25	.71
良さ	.31	.66	.85
好ましさ	-.03	.92	.80
因子寄与	2.98	.22	
因子相関行列	第1因子	第2因子	
第1因子	—	.79	
第2因子		—	

価値志向性尺度（酒井他，1998）の「審美」の合計得点に基づいて，群分けを行った。実験参加者 89 名のうち合計得点の低かった下位 33%を低群（男性 25 名，女性 5 名の計 30 名），合計得点の高かった上位 33%を高群（男性 21 名，女性 9 名の計 30 名）とした。美術経験が有ると回答した実験参加者は，低群が 0 人，高群が 2 人であった。また，低群と高群ごとに，醜い対象が描かれた絵画および美しい対象が描かれた絵画において，全刺激（風景画，静物画，人物画）に対する各尺度の合計得点の平均値と標準偏差を算出した（Table 3.1.4）。

Table 3.1.4.

醜い対象及び美しい対象が描かれた絵画に対して，全刺激（風景画，静物画，人物画）に対する低群と高群の各尺度の合計得点の平均値（ $N = 60$ ）

		高群 ($N=30$)		低群 ($N=30$)	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
醜い対象が 描かれた絵画	良さ	15.20	3.48	12.83	3.69
	好ましさ	15.50	4.24	12.73	3.56
	美的評価得点	30.70	7.30	25.57	6.97
美しい対象が 描かれた絵画	良さ	19.50	3.34	18.37	4.04
	好ましさ	18.83	3.04	17.47	4.04
	美的評価得点	38.33	6.01	35.83	7.90

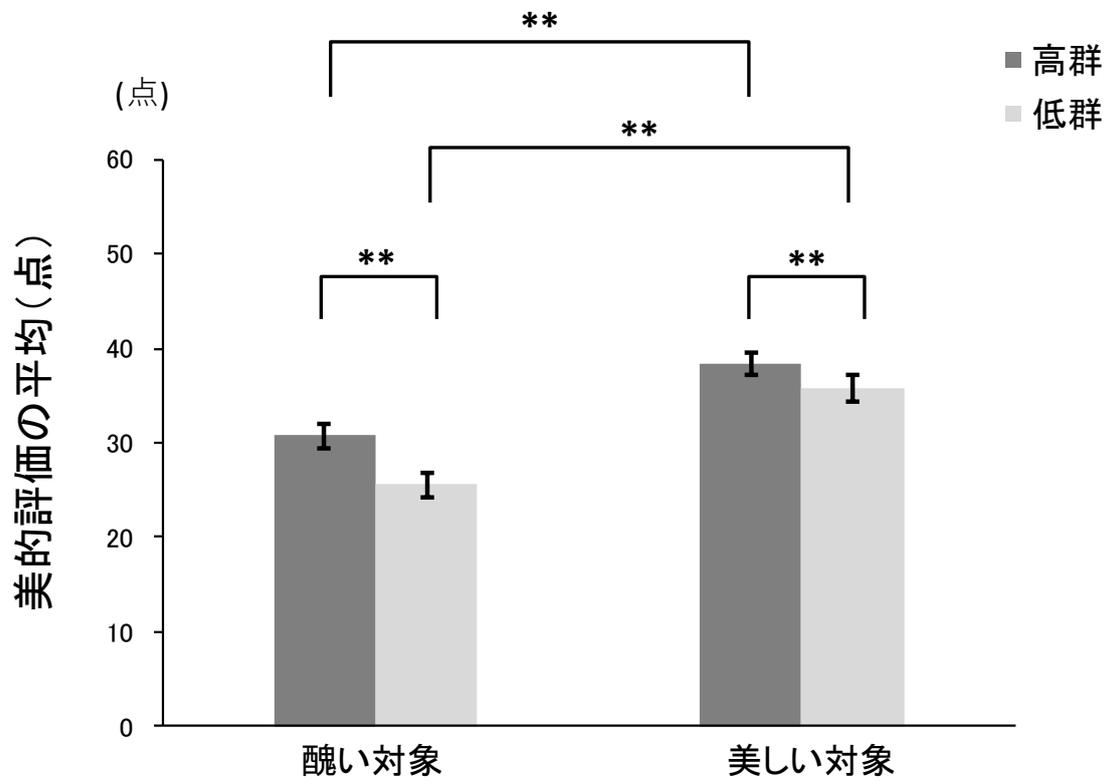
注：美的評価得点の得点範囲は6—54。

良さ、好ましさを合計した美的評価得点について、2（審美的価値観：高群、低群）×2（絵画：美、醜）の2要因分散分析を行った（Figure3.1.3）⁵。その結果、絵画の美醜の主効果が認められた（ $F(1,58) = 60.27, p < .001, \eta^2_p = .51$ ）。醜い対象が描かれた絵画より美しい対象が描かれた絵画の方が美的評価が高かった。また、審美的価値観の主効果が認められた（ $F(1,58) = 7.25, p = .009, \eta^2_p = .11$ ）。低群より高群の方が美的評価が高い結果となった。交互作用は認められなかった（ $F(1,58) = 1.30, n.s.$ ）。

⁵ 筒井他（2009）の研究は、絵画に対する美的評価を検討した結果、美しさと快さは個人差の少ない美的評価、一方、良さと好ましさ個人差の大きい美的評価であることを示している。この結果を踏まえ、宮下他（2016a）の研究は、審美的価値観が美的評価における個人差を規定する要因であることを検討している。すなわち、絵画に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討する上で、美しさと快さおよび良さと好ましさをそれぞれ従属変数として扱い、美しさと快さは審美的価値観と関連しない一方で、良さと好ましさは審美的価値観と関連するかを検討している。

美しさと快さの評価について、2（審美的価値観：高群、低群）×2（絵画：美、醜）の2要因分散分析を行った。その結果、絵画の美醜の主効果が認められた（ $F(1,58) = 179.34, p < .001, \eta^2_p = .76$ ）。一方で、審美的価値観および交互作用の主効果は認められなかった（順に、 $F(1,58) = 1.39, n.s.$; $F(1,58) = 1.11, n.s.$ ）。

これらの結果から、宮下他（2016a）は、美しさと快さは審美的価値観と関連がみられなかった一方で、良さと好ましさは審美的価値観と関連がみられたと結論づけている。



エラーバーは標準誤差を示す
 **: $p < .01$

Figure3.1.3. 分散分析の結果 (N = 60)。

3.1.4. 考察

本研究の目的は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜に左右されず、絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

まず、美しさ、快さ、良さ、好ましさの4つの形容詞対に対して因子分析を行った結果、第2因子の寄与率が低いことが示された。すなわち、第1因子が大部分の因子寄与を占め、第2因子の因子寄与は低かったことから、本研究では明確な2因子構造が確認されたとは言い難い。従って、Berlyne (1974) が指摘するように語彙の違いをこえて HT 尺度に共通する評価軸が存在することが伺える。

次に、審美的価値観と絵画の美的評価との関連について考察していく。分散分析の結果、審美的価値観の高群は低群よりも、美醜どちらの内容が描かれた絵画に対しても美的評価が高い結果となった。また、重回帰分析の結果、審美的価値観の標準偏回帰係数が絵画の美的評価に対して有意であった。つまり、審美的価値観は絵画の美的評価により明瞭な影響を及ぼしたと考えられる。これらの結果より、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜に左右されず美的評価と関連するという本研究の結果の予測を支持するものであった。

醜い対象が描かれた絵画に対して、高群の方が低群より評価値が高かった。この結果は、高群は醜い対象が描かれた絵画に対しても、より良さや好ましい側面

を感じとったことを示唆する。審美的価値観の測定尺度には「芸術的なものに対する興味」や「物事の美しい面を捉える」といった内容が含まれることから、高群は芸術に対する関心が高いと考えられる。つまり、高群の参加者は作品に対する解釈などから、一見醜い対象が描かれた絵画についても、相対的に高く評価したものと推察される。これらのことより、審美的価値観の高い者は、作品のモチーフや全体的な感性印象がネガティブなものであっても、解釈に基づく作品の価値づけを行っていたことが示唆される。事実、本研究で用いた絵画はいずれも歴史的に高い評価を受けている作品であり、審美的価値観高群は感覚的な美醜をこえて作品の価値を評価したものといえる。

ローゼンクランツ (2004) によれば、美しい対象が描かれた芸術のみに注目することは、表面的な解釈になってしまうと指摘している。そのため、美醜を切り離して捉えるのではなく、これらを並列的に捉えることが、芸術鑑賞において重要であると示唆している。ローゼンクランツ (2004) の指摘を踏まえると、審美的価値観を重視する人は、醜い対象が描かれた絵画に対して表面的な観点から美的評価を行っていなかったと考えられる。すなわち、描かれた対象の一見した美醜のみではなく、解釈なども含めた総合的な作品の評価が美的評価に反映されたと推察できる。今後、審美的価値観と「醜さの判断」の関係についても、精緻に検討する必要があるだろう。

最後に今後の課題について述べる。本研究では、鑑賞者の審美的価値観が美的評価に影響するという因果関係を検証しているが、美的評価もまた審美的価値観に影響している可能性も考えられる。本田（2012）によれば、芸術作品の鑑賞のプロセスにおいて、作品と鑑賞者との間には相互作用が生じることを述べている。言い換えれば、作品と鑑賞者との間のコミュニケーションである。この相互作用の場では、作品への評価という美的経験からもまた鑑賞者自身へ作用が及び、そこから価値観が生成されると述べられている。この本田（2012）の指摘を踏まえると、美的評価から審美的価値観が形成される可能性も考えられよう。従って、美的評価が審美的価値観に影響するのか、あるいは美的評価と審美的価値観は相関関係なのかといった点を詳細に検討する必要もあるといえる。

3.2. 研究3: 審美的価値観は、絵画に描かれている内容の具象性・抽象性に左右されず美的評価と関連するか?⁶

3.2.1. 目的

研究3の目的は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の具象性・抽象性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

筒井他(2009)の研究結果を踏まえ、美しさと快さは個人差の小さい美的評価、一方、良さと好ましさは個人差の大きい美的評価であることが示された。さらに、美的評価における個人差要因として、審美的価値観があるという新たな知見が研究2から示唆された。

本研究では、筒井他(2009)の研究で用いられた3点のリアリズム絵画を、何が描かれているか理解しやすい具象作品と定義した。具象性に伴う意味の把握の容易さから美術の非専門家は具象作品を好むことを踏まえると、美術非専攻の学生の美的評価は総じて高くなりやすいと考えられる。そこで、筒井他(2009)の絵画に加え、“何が描かれているか分からない絵画”(岡田・井上, 1991)であ

⁶ 本研究は、次の学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2015) . 審美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討——抽象画と具象画に注目した場合——, 第17回日本感性工学会大会, 発表番号 P03. Miyashita, T., Kimura, A., & Oka, T. (2016). The relationship the aesthetic dimension of value and aesthetic evaluations of paintings: A case study focusing on representational and abstract paintings The 31st International Congress of Psychology, PS28P-09-59.

る抽象画も用いて、審美的価値観は絵画の具象性・抽象性に左右されず、美的評価と関連するか検討することを目的とした。結果の予測は、審美的価値観を重視する群は（審美的価値観高群；以下，高群）そうでない群（審美的価値観低群；以下，低群）に比べて、抽象画及び具象画いずれの絵画に対しても、絵画に対する美的評価が高くなると考えた。

3.2.2. 方法

実験計画 2（審美的価値観：低群，高群）×2（絵画：抽象画，具象画）の2要因混合計画であった。

実験参加者 大学生 96 名（男性 36 名，女性 60 名，平均年齢 19.08 歳， $SD = 1.12$ 歳）であった。

刺激 筒井他（2009）で使用された具象画 3 点と，筒井・近江（2010）の研究で使用された抽象画 3 点（Figure 3.2.1）の合計 6 点を用いた。なお，具象画は，研究 2 で使用された風景画，静物画，人物画と同様の絵画であった（Figure 3.1.2-1）。また，抽象画は，岡田・井上（1991）の“何が描かれているか分からない絵画”という定義を基軸に実験者が選定したものであった。



Figure 3.2.1 筒井・近江（2010）の研究で用いられた3点の抽象画。

質問紙 絵画の評定には、筒井他（2009）のヘドニックトーン（Hedonic tones；以下，HT）尺度を用いた。すなわち，“醜い-美しい”，“不快な-快い”，“悪い-良い”，“嫌いな-好きな”の4種の形容詞対について，両極型の9段階評定（左側：1点－右側：9点）で回答するものであった。

審美的価値観を測定する質問紙尺度は，酒井他（1998）の価値志向性尺度を用いた。この尺度は6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中で，「審美」を測定する12項目を本研究で用いた。実際の項目には，「物事の美しい面を捉え，どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に，強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は，「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法であった。

手続き 実験は，一斉調査形式で行った。回答の順番は，まず絵画の評定を一斉に実施した後で，価値観を測定する尺度への回答を求めた。絵画は教室の大型スクリーンに1枚ずつ呈示し，質問紙の評定尺度へ回答を求めた。絵画の呈示順序は具象画の次に抽象画の順で行うことによって，カウンターバランスをとった。参加者全員が絵画評定を終えたことを確認した後，価値志向性尺度への回答を求めた。

3.2.3. 結果

HT 尺度の因子構造を確認するために、全データを合わせて因子分析（主因子法，プロマックス回転）を実施した。分析の結果，2 因子が抽出され，第 1 因子は美しさと快さ，第 2 因子は良さと好ましさがそれぞれ高い因子負荷量を示した（Table 3.2.1）。

Table 3.2.1.

各因子を構成する形容詞対尺度と因子負荷量 (N = 96)

	第1因子	第2因子	共通性
美しさ	1.01	-.03	.96
快さ	.69	.25	.82
良さ	.35	.62	.84
好ましさ	-.02	.89	.76
因子寄与	3.15	.22	
因子相関行列	第1因子	第2因子	
第1因子	—	.79	
第2因子		—	

続いて、価値志向性尺度の「審美」の合計得点に基づいて群分けを行った。実験参加者 96 名のうち合計得点の低かった下位 33%を低群（男性 17 名，女性 15 名の計 32 名），合計得点の高かった上位 33%を高群（男性 9 名，女性 23 名の計 32 名）とした。また，低群と高群ごとに，抽象画と具象画における全刺激に対する美的評価得点の平均値と標準偏差を算出した（Table 3.2.2）。

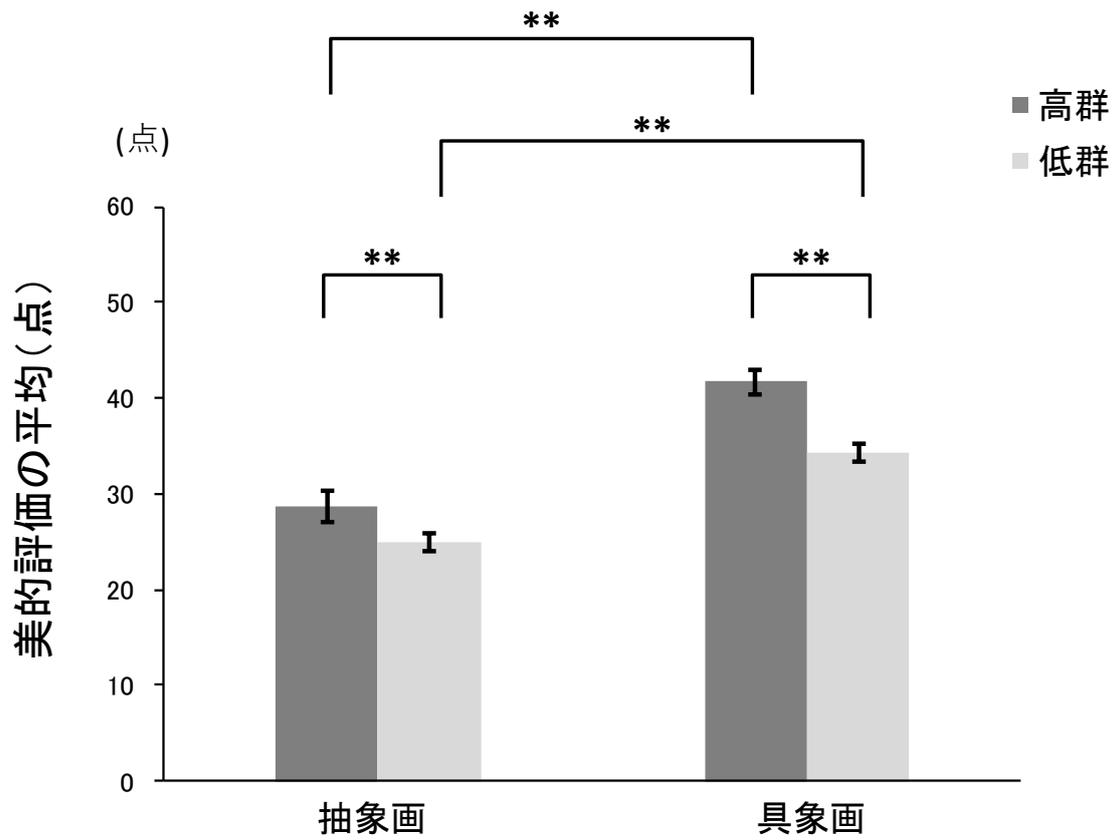
Table 3.2.2.

抽象画と具象画における，低群と高群の全刺激に対する平均値 ($n = 64$)

		高群 ($n = 32$)		低群 ($n = 32$)	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
抽象画	良さ	14.97	4.61	13.59	2.96
	好ましさ	13.78	5.58	11.38	3.54
	美的評価得点	28.75	9.27	24.97	5.67
具象画	良さ	21.66	3.77	17.69	2.61
	好ましさ	20.03	4.48	16.56	2.64
	美的評価得点	41.69	7.71	34.25	4.99

注：美的評価得点の得点範囲は6 - 54。

最後に、審美的価値観と絵画を独立変数、絵画の美的評価得点を従属変数として2要因混合計画の分散分析を行った (Figure 3.2.2)。その結果、絵画の主効果が認められた ($F(1,62) = 89.72, p < .001, \eta^2_p = .59$)。低群及び高群のどちらの群も、抽象画より具象画の方が美的評価得点が高くなった。審美的価値観の主効果が認められた ($F(1,62) = 17.60, p < .001, \eta^2_p = .22$)。抽象画及び具象画において、低群より高群の方が美的評価得点が高い結果となった。交互作用は認められなかった ($F(1,62) = 2.43, n.s.$)。



エラーバーは標準誤差を示す
 **: $p < .01$

Figure3.2.2. 分散分析の結果 (N = 64)。

3.2.4. 考察

研究 3 の目的は、審美的価値観は絵画に描かれている内容の具象性・抽象性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

因子分析の結果、第 2 因子の寄与率が低いことなどから、本研究においては HT 尺度内で明確な 2 因子構造が確認されなかった。従って、美しさおよび快さ、また、良さおよび好ましさは、それぞれ 2 因子構造としてまとまらず、研究 2 と同様の結果となった。

審美的価値観と絵画の美的評価との関連について、審美的価値観の高い人は低い人に比べて、抽象画と具象画どちらに対しても絵画の美的評価が高い結果となった。この結果より、審美的価値観は絵画に描かれている内容の具象性・抽象性に左右されず、絵画の美的評価と関連することが示唆された。

これまでの先行研究の知見から、芸術の非専門家は具象絵画を好むことが示されてきた (Hakkert & van Wieringen, 1996)。しかしながら、本研究の結果は、参加者のほとんどが造形教育を受けていない一般の大学生であったのにも関わらず、審美的価値観の高低により絵画の美的評価に差異がみられた。この結果を踏まえると、美的対象に魅せられる人とそうでない人の差に、審美的価値観がその要因の一つとしてあることを本研究は示したといえる。

3.3. 総合考察

第3章では、審美的価値観は絵画に描かれている内容に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討した。

研究2は、美醜の内容が描かれた絵画に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討した。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に描かれている内容が美しいもの及び醜いもののどちらであっても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

研究3は、抽象・具象の内容が描かれた絵画に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討した。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、抽象画あるいは具象画のどちらであっても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

研究2および研究3の結果より、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に描かれている内容が美しいものあるいは醜いものであっても、また、具象画あるいは抽象画であっても、絵画に対する美的評価が高いことを示した。従って、審美的価値観は、絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず、一貫して美的評価を規定することが示唆された。

第4章 審美的価値観は絵画の既知性，美術経験，開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか？

4.1. 研究4: 審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価と関連するか？

4.1.1. 目的

研究4の目的は、審美的価値観は絵画の既知性に左右されず、絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

ある絵画に反復して接触することが、その絵画を知っているという既知性（familiarity）を生じさせるといえる。従って、単純接触効果（Zajonc, 1968）に基づく既知性が絵画の美的評価を規定すると考えられる。

一方、絵画の美的評価を規定する要因として着目した審美的価値観は、美を重視する価値観であり（Spranger, 1921）、この価値観を重視する人は美しいかどうかという判断基準を自身の行動において最も重視すると考えられている。そのため、審美的価値観はその絵画を観たことがあるといった既有知識から独立すると考えられる。従って、審美的価値観は絵画に対する既知性から独立して、絵

画の美的評価を規定すると考えられる。

そこで本研究は、審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価を規定するか検討することを目的とした。具体的には、“あなたはその絵画を観たことがありますか？”という質問に対して、“はい”と“いいえ”の2件法で回答を求めた。この質問により、絵画の既知性を測定した。結果の予測としては、審美的価値観は絵画に対する美的評価と関連する一方で、既知性はこれらとは関連しないと考える。

4.1.2. 方法

参加者 大学生 79 名（男性 27 名，女性 53 名，平均年齢 19.13 歳， $SD = 1.18$ 歳）であった。

刺激 研究 2 で使用された美しい対象が描かれた絵画 3 点（風景画，静物画，人物画）（Figure 3.1.2-1）及び醜い対象が描かれた絵画 3 点（風景画，静物画，人物画）（Figure 3.1.2-2）の合計 6 点を用いた。

質問紙 絵画の美的評価の評定には、筒井他（2009）で使用された 4 項目の形容詞対（i.e., 美しさ，快さ，良さ，好ましさ）を用いた。回答方法は 9 件法であった。また、絵画の既知性には、「あなたはその絵画を見たことがありますか？」

という質問に、2件法（はい・いいえ）で回答を求めるものであった。

審美的価値観を測定する質問紙尺度は、酒井他（1998）の価値志向性尺度を用いた。この尺度は6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中で、「審美」を測定する12項目を本研究で用いた。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法であった。

手続き 実験は、一斉調査形式で行った。回答の順番は、まず絵画の評定を一斉に実施した後で、価値観を測定する尺度への回答を求めた。まず、絵画を大型スクリーンに1枚ずつ呈示し、絵画作品の美的評価の評定および既知性を回答してもらった。その後、価値志向性尺度への回答を求めた。

4.1.3. 結果

絵画 6 点に対する美的評価を測定した 4 項目（美しさ，快さ，良さ，好ましさ）について，合計得点の平均を算出した⁷。また，価値志向性尺度の「審美的価値観」の合計得点の平均を算出した。これらの平均を Table 4.1.1 に示す。

⁷ 研究 2 および研究 3 は，4 つの美的評価項目について，美しさおよび快さ，良さおよび好ましさのそれぞれ 2 因子に分割できるかを検討している。因子分析の結果，因子間相関が研究 2 では $r = .79$ ，研究 3 では $r = .79$ であったことから，1 因子構造であると考えられる。従って，研究 4 では，4 項目（美しさ，快さ，良さ，好ましさ）を合計した得点を美的評価得点とした。

Table4.1.1.

絵画の美的評価および審美的価値観の合計得点の各平均
($N = 79$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
美的評価	131.72	21.26
審美的価値観	45.88	5.95

※美的評価の得点範囲は、24-216

※審美的価値観の得点範囲は、12-60

次に、絵画の既知性について算出した。絵画 6 枚の刺激に対して、「あなたは
その絵画を見たことがありますか？」という質問について、6 枚全てに「はい」
と回答した参加者が 30 名、一方、6 枚全てに「いいえ」と回答した参加者が 49
名であった。

さらに、絵画に対する美的評価を目的変数、審美的価値観および既知性を説明
変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。なお、説明変数である既知性
は、「はい」を 1、「いいえ」を 0 とするダミー変数として扱った。重回帰分析
の結果を Figure 4.1.1 に示す。分析の結果、重回帰式は有意であった ($F(2,76) =$
 $7.08, p = .002$)。決定係数は $R^2 = .14$ であった。重回帰式が有意であったことか
ら、説明変数が目的変数に及ぼす影響力の大きさを示す標準偏回帰係数を算出
した。その結果、審美的価値観の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = .36, p = .001$)。
一方、既知性の標準偏回帰係数が有意ではなかった ($\beta = .16, n.s.$)。

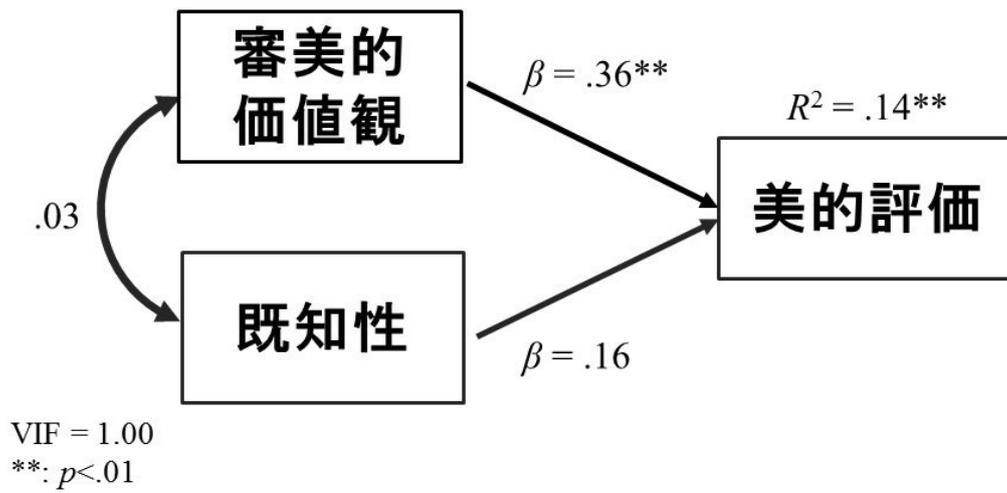


Figure 4.1.1. 重回帰分析の結果 ($N = 79$)。

4.1.4. 考察

研究 4 の目的は、審美的価値観は絵画の既知性から独立して、絵画の美的評価を規定するか検討することであった。

重回帰分析の結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連した一方で、既知性はこれらと関連しなかった。また、審美的価値観と既知性との関連は、弱いことも示された。これらの結果より、審美的価値観は絵画の既知性に左右されず、絵画に対する美的評価を規定することが示唆された。

本研究の結果より、審美的価値観の高い人は、単純接触効果に関わらず、絵画に対する美的評価を行っているかと推察される。すなわち、先行研究では、対象に対する反復接触がその対象への好意度を高めることより、接触回数の多い刺激は既知性が高いと考えられている一方、本研究では、そうした接触回数とは独立して審美的価値観が絵画の美的評価と関連することが示唆された。

本研究より、既知性は絵画の美的評価と関連しないことが示唆された。そのため、知覚的流暢性の誤帰属 (Bornstein & D'Agostino, 1992; Jacoby & Kelly, 1987) が絵画の美的評価を規定したとは、本研究の結果から考え難い。従って、絵画の美的評価と刺激に対する情報処理の流暢さとの関連性は、弱いものと考えられる。両者の関連性の弱さから推察すると、絵画の美的評価が情報処理の流暢性を規定していた可能性は低いと考えられる。従って、審美的価値観は既知性から独

立して絵画の美的評価を規定することを示している。

また、本研究の結果から、美術経験から得られる専門的知識のみならず、単にその絵画を観たことがあるという既有知識に左右されず、審美的価値観は絵画の美的評価を規定することが示すものであった。

4.2. 研究5: 審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連するか?⁸

4.2.1. 目的

研究5の目的は、審美的価値観は美術経験の有無に左右されず、絵画に対する美的評価と関連するか検討することであった。

これまでの先行研究は、経験・学習の要因として美術経験の有無に着目したものが多く、美術経験が美的選好に影響を及ぼすことが示されてきた (e.g., Carey, Rosen, Krishnan, Pearce, Shepherd, Aydelott, & Dick, 2015; Cupchik & Gebotys, 1988; Hekkert & van Wieringen, 1996a, 1996b; 車, 2005; 仲谷・藤本, 1984)。

その一方で社会的階級といった社会環境も芸術の好みに影響を及ぼすことが報告されていることから (e.g., Cohen & Hodges, 1963; Knapp, Brimenr, & White, 1959), 美術経験といった単一の経験要因のみならず、社会との関わりも含めて形成される個人の総合的な価値体系に着目することが有用と考えられる。

そこで本研究では、美術経験に明らかな差がある対象者群を比較することで、

⁸ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2016b) . 審美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討 (2) —美大生と一般大学生の比較—, 日本大学心理学研究, 37, 28-36. Miyashita, T., Kimura, A., & Oka, T. (2016). Individual differences in aesthetic evaluations of visual arts: Focusing on aesthetic dimension of value and art-expert, The 39th European Conference on Visual Perception, 3P004.

審美的価値観と美術経験が美的評価に及ぼす影響を数量的に検討することを目的とした。なお、美術経験として美術の専門的教育を受けている美大生を経験有群、非美術専攻の学生（一般学生）を経験無群とみなした。なお、一般学生の実験参加者に美術経験の有無を回答させた結果、審美的価値観の低群が 0 名、高群が 3 名とごく少数であった。そのため、一般学生を美術の経験無群とみなした。また本研究で使用した絵画刺激は、筒井他（2009）の実験を踏襲し、筒井他（2009）と同様の 3 点の具象画を用いることとした。しかし、具象性に伴う意味の把握の容易さから美術の非専門家は具象作品を好む（筒井・近江，2010）という先行研究の知見を踏まえると、実験材料である絵画が美的評価に強く影響を及ぼす可能性が考えられる。そのため、“何が描かれているか分からない絵画”である抽象画（岡田・井上，1991）も刺激として用いることにより、絵画の種類によって美的評価が左右されることを防止した。

結果の予測としては、以下の通りであった。すなわち、美大生および一般学生のどちらにおいても、審美的価値観の高い者は低い者に比べて絵画に対する美的評価が高くなると考える。これは、審美的価値観を重視する場合は美術経験よりも審美的価値観が個人差要因として優勢的に影響すると考えられるからである。

4.2.2. 方法

実験計画 審美的価値観（2：高群，低群）×美術経験（2：有，無）を独立変数とする2要因の被験者間計画であった。従属変数である美的評価項目は、「良さ」と「好ましさ」の2項目であった。

実験参加者 美術経験のある実験参加者について、首都圏の四年制大学にて、芸術学部学生を対象とした。総回答者数168名のうち、日本語の意味が正しく理解できなかった留学生24名と、回答に欠損のあった4名のデータを除外し、140名（男性76名，女性64名，平均年齢19.12歳， $SD=1.18$ 歳）を分析対象とした。

一方、美術経験のない実験参加者について、首都圏四年制大学文理学部心理学科学生のデータを用いた。総回答者数97名のうち、回答に欠損の無い96名（男性36名，女性60名，平均年齢19.08歳， $SD=1.12$ 歳）を分析対象とした。

刺激 研究3で使用されたものと同様の計6点の絵画を刺激とした。すなわち、これは筒井他（2009）で使用された具象画3点（Figure 3.1.2-1）と、筒井・近江（2010）で使用された抽象画3点（Figure 3.2.1）の構成であった。なお、抽象画は、岡田・井上（1991）の“何が描かれているか分からない絵画”という定義を基軸に実験者が選定したものであった。

質問紙 絵画に対する美的評価を測定する尺度と、審美的価値観を測定する

尺度を綴じた質問紙を用いた。なお、前半に絵画に対する評定、後半に審美的価値観を測定した。

絵画に対する美的評価を測定する尺度には、筒井他（2009）の HT 尺度を用いた。すなわち，“醜い-美しい”，“不快な-快い”，“悪い-良い”，“嫌いな-好きな”の4種の形容詞対について、両極型の9段階評定（左側：1点-右側：9点）で回答させた。

審美的価値観を測定する質問紙尺度は、酒井ら（1998）の価値志向性尺度を用いた。この尺度は6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中で、「審美」を測定する12項目を本研究で用いた。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法であった。

手続き 実験は、授業時間内を利用した一斉調査形式で行った。回答の順番は、まず絵画の評定を一斉に実施した後で、価値観を測定する尺度への回答を求めた。絵画は教室の大型スクリーンに1枚ずつ呈示し、質問紙の評定尺度へ回答を求めた。絵画の呈示順序による順序効果を防ぐために、具象画の次に抽象画の順で行うことによってカウンターバランスをとった。なお、呈示する試行数が少

ない場合は無作為化よりカウンターバランスの方が順序効果の防止に有効である（高野，2008）ことを踏まえ，本実験では全6点の絵画刺激の呈示はカウンターバランスにより統制した。参加者全員が絵画評定を終えたことを確認した後，価値志向性尺度への回答を求めた。所要時間は，教示も含めて約25分であった。

4.2.3. 結果

美大生と一般学生の審美的価値観の比較 「審美」に対する価値志向性尺度の合計得点に基づいて群分けを行った。美大生140名のうち合計得点の上位33%を高群（男性20名，女性27名の計47名），合計得点の下位33%を低群（男性31名，女性16名の計47名）とした。一般学生96名についても同様に，合計得点の上位33%を高群（男性9名，女性23名の計32名），合計得点の下位33%を低群（男性17名，女性15名の計32名）とした。美大生と一般学生の審美的価値観得点について，それぞれの全体，高群，低群の平均値を Table 4.2.1 に示す。

Table 4.2.1.

美大生と一般学生における審美的価値観の合計得点の平均値と標準偏差

	美大生	一般学生	<i>t</i> 値
全体	45.86 (7.20)	43.67 (7.80)	2.26*
高群	53.02 (2.74)	52.13 (3.49)	1.28
低群	37.66 (4.78)	35.13 (4.51)	2.36*

注：（）内は標準偏差，*： $p < .05$ ，審美的価値観の得点範囲は12－60。

美大生と一般学生とで審美的価値観の高さに差があるかを調べるために、両群の平均値に対して等分散を仮定した2標本間の t 検定を行った。その結果、まず全体において、一般学生に比べ美大生の方が審美的価値観が有意に高かった ($t(234) = 2.26, p = .025, r = .15$)。次に低群においても、一般学生に比べ美大生の方が審美的価値観が有意に高かった ($t(77) = 2.36, p = .021, r = .26$)。高群においては、一般学生と美大生の審美的価値観に差は見られなかった ($t(77) = 1.28, n.s.$)。

審美的価値観と美術経験が具象画の美的評価に及ぼす影響 具象画に対する美的評価得点を、審美的価値観の高低と美術経験の有無ごとにまとめて Table 4.2.2 に示す。

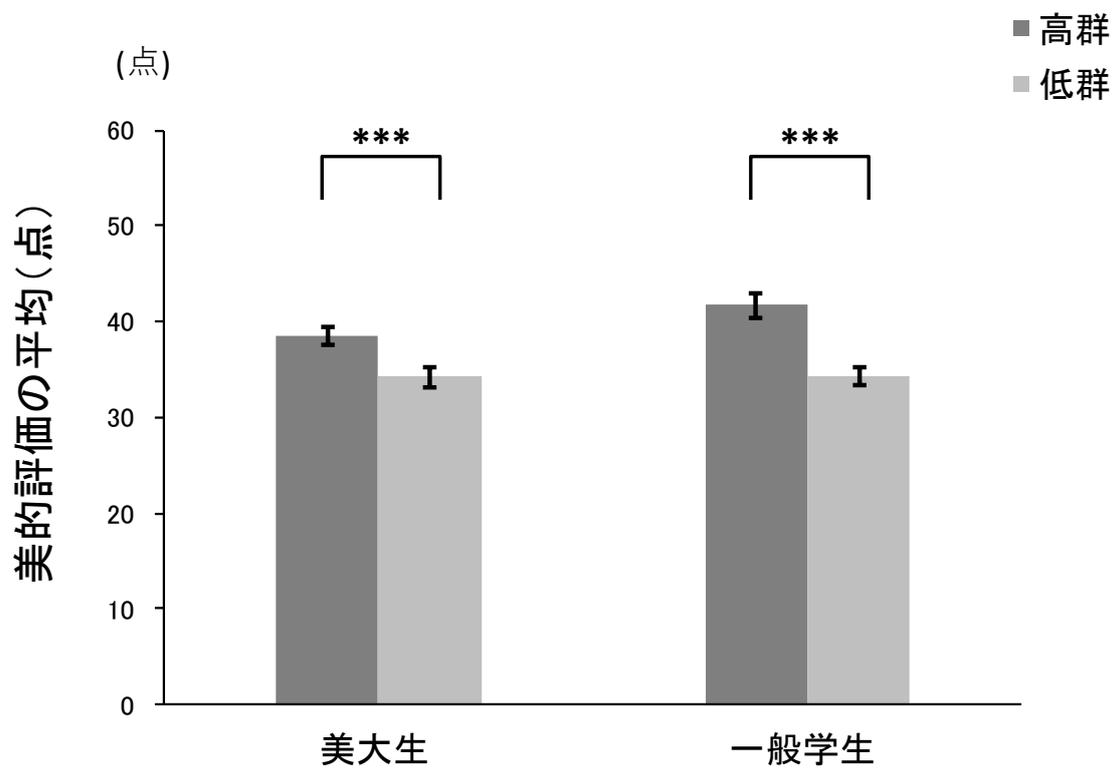
Table 4.2.2.

美大生および一般学生の高群と低群ごとの具象画に対する合計得点の平均値

		高群		低群	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
美大生 (<i>N</i> = 94)	良さ	19.49	3.31	17.15	3.96
	好ましさ	18.98	3.58	17.09	3.56
	美的評価得点	38.47	6.37	34.23	6.89
一般学生 (<i>N</i> = 64)	良さ	21.66	3.77	17.69	2.61
	好ましさ	20.03	4.48	16.56	2.64
	美的評価得点	41.69	7.71	34.25	4.99

注：美的評価得点の得点範囲は6-54。

具象画に対する美的評価について、2（審美的価値観：高群，低群）×2（美術経験：有，無）の二要因分散分析を行った（Figure 4.2.2）。その結果，審美的価値観の主効果が認められた（ $F(1,154) = 29.94, p < .001, \eta^2_p = .16$ ）。美大生および一般学生ともに，低群より高群の方が美的評価得点が高かった。美術経験の主効果および交互作用は認められなかった（順に， $F(1,154) = 2.30, n.s.$ ； $F(1,154) = 2.26, n.s.$ ）。



エラーバーは標準誤差を示す
 ***: $p < .001$

Figure 4.2.1. 分散分析の結果 ($N = 158$)。

審美的価値観と美術経験が抽象画の美的評価に及ぼす影響 抽象画に対する美的評価得点を、審美的価値観の高低と美術経験の有無ごとにまとめて Table 4.2.3 に示す。

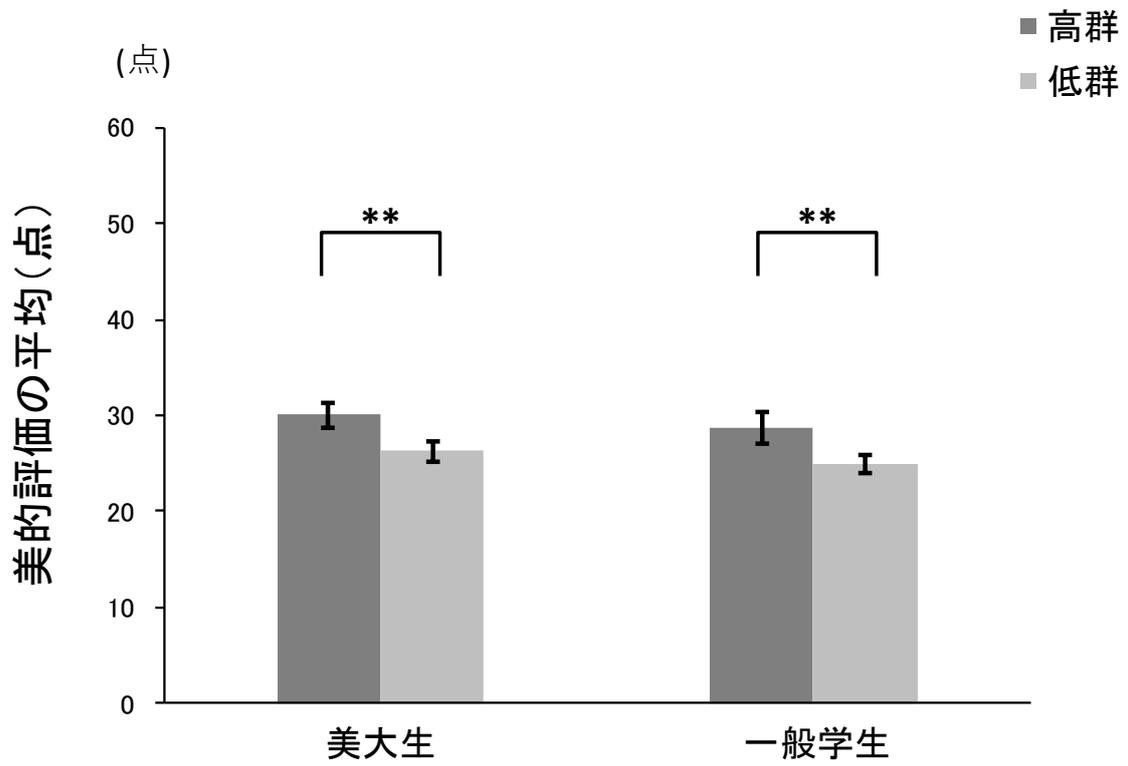
Table 4.2.3.

美大生および一般学生の高群と低群ごとの抽象画に対する合計得点の平均値

		高群		低群	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
美大生 (<i>N</i> = 94)	良さ	15.57	4.35	13.36	3.49
	好ましさ	14.45	5.16	12.96	4.30
	美的評価得点	30.02	8.46	26.32	7.27
一般学生 (<i>N</i> = 64)	良さ	14.97	4.61	13.59	2.96
	好ましさ	13.78	5.58	11.38	3.54
	美的評価得点	28.75	9.27	24.97	5.67

注：美的評価得点の得点範囲は6-54。

抽象画に対する美的評価について、2（審美的価値観）×2（美術経験）の二要因分散分析を行った（Figure 4.2.3）。その結果、審美的価値観の主効果が認められた（ $F(1,154) = 8.75, p = .004, \eta^2_p = .05$ ）。美大生および一般学生ともに、低群より高群の方が美的評価得点が高かった。美術経験の主効果および交互作用は認められなかった（順に $F(1,154) = 1.07, n.s.$; $F(1,154) = 0.001, n.s.$ ）。



エラーバーは標準誤差を示す
 **: $p < .01$

Figure 4.2.2. 分散分析の結果 ($N = 158$)。

4.2.4. 考察

研究 5 の目的は、審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連するか検討することであった。

美大生と一般学生の審美的価値観を比較したところ、全体及び審美的価値観の低群では差があり、どちらも一般学生より美大生の審美的価値観の方が高い結果となった。この結果を踏まえると、審美的価値観を重視しない低群においては、美術経験の有無という集団間の特性の違いによって差が生じたと考えられる。また全体で差が生じた点について、本研究から得られた全体の平均値と、酒井他（1998）の研究から示された審美的価値観得点の平均値（ $M = 42.12$, $SD = 7.92$ ）⁹を見比べると、2群の平均値や標準偏差には差がないと考えられる。この結果を踏まえると、美大生と一般学生の両群全体で平均値差があったことは、美大生の低群における審美的価値観得点が相対的に影響を与えたと考えられる。一方で高群では、一般学生群の平均値は美大生よりも著しく低いものではなかった。従って、美術経験のあることが審美的価値観を高めることに単に影響する

⁹ 酒井他（1998）の研究では 855 名を対象に調査した結果、「審美」の平均値は 3.51 と記載してある。この数値は、審美を測る 12 項目の合計得点を項目数の 12 で除したものであった。そのため、本文中に記載した酒井他（1998）の「審美」の平均値（ $M=42.12$ ）は、3.51 に 12 をかけたものである。また標準偏差についても、12 で除した値の 0.66 と記載がされていたため、12 をかけた値の $SD = 7.92$ と本文中に記載した。

ことではないことが本研究の結果から示された。

審美的価値観を重視する高群においては、美大生と一般学生の間には審美的価値観の差はみられなかった。審美的価値観の範囲は12～60点であるが、高群の平均得点は美大生が53.0点 ($SD = 2.7, Max = 60, Min = 50, Median = 53$), 一般学生が52.1点 ($SD = 3.5, Max = 59, Min = 47, Median = 52$) であり (Table 5.1.4), 両群の得点とも正規分布を大きく逸脱していないことから、天井効果とはいえない。美術教育という個人的経験がない一般学生群においても、美術経験者と同等に審美を重視する価値観を有する者がいることが示された。美大生は、一般学生よりも全体として審美的価値観が高いことが示された。また、高群では美大生と一般学生の両方で審美的価値観に差がなかったが、低群では美大生は一般学生よりも審美的価値観が高い結果となった。この結果は、全体的な傾向は低群の傾向を反映しているものと考えられる。

しかしながら、 t 検定の結果からは美大生と一般学生の審美的価値観の平均値差が示されたのみである。群間の平均値差があったことは、美術経験の有無という属性を持った集団の平均値差が示されたことであるため、それが個人差を反映しているかという点については今後検討が必要である。

具象画に対する美的評価に対して、美大生および一般学生のいずれにおいても、審美的価値観の高群は低群よりも絵画の美的評価が高い結果となった。この

結果は、美術経験の有無に関わらず、審美的価値観は絵画の美的評価を規定することを示している。前述にもあるように、審美的価値観を重視する場合は、美大生と一般学生の集団間の特性の違いが見られないことが示唆されている。これらのことより、審美的価値観は美術経験の有無から独立して具象画に対する美的評価と関連するといえる。

また、抽象画に対する美的評価に対して、美大生および一般学生のいずれにおいても、審美的価値観の高群は低群よりも絵画の美的評価が高い結果となった。従って、具象画のみならず抽象画を提示した場合であっても、審美的価値観は美術経験の有無から独立して抽象画に対する美的評価と関連するといえる。

抽象画および具象画に対する美的評価において、いずれの種類の絵画が提示されたとしても美術経験の主効果はみられなかった。これまでは、美術経験の有無が美的評価の選好に影響するという知見 (e.g., Carey et al., 2015; Cupchik & Gebotys, 1988; Hekkert & van Wieringen, 1996a, 1996b; 車, 2005; 仲谷・藤本, 1984) が多かったことに対し、美術経験とは独立して審美的価値観が美的評価の個人差に影響を及ぼすことが示されたといえる。

具象画や抽象画といった絵画の内容に左右されず、美大生における審美的価値観の高群は低群よりも絵画の美的評価が高かった。先行研究から、芸術の非専門家は抽象化された絵画よりも具象絵画を好むことが指摘されている

(Hekkert & van Wieringen, 1996a)。しかしながら、本研究は、具象画および抽象画いずれの絵画が提示された場合においても、美術経験による評価の差は生じないことを示している。一方、審美的価値観の高群は、これらの絵画の種類に左右されず、絵画に対する美的評価が高い結果を示している。これらのことを踏まえると、審美的価値観は美術経験の有無よりも、絵画の美的評価に対してよりプリミティブな影響を与えていると推察される。

最後に、今後の課題について述べる。本研究では、美術経験と審美的価値観の因果関係は検討していない。そのため、美術経験が審美的価値観を高めるのか、あるいは審美的価値観が美術経験を高めるのかという点についても、今後精緻に検討する必要があるだろう。

4.3. 研究 6a : 審美的価値観は Big Five の開放性から独立して絵画の美的評価と関連するか?¹⁰

4.3.1. 目的

美的評価と関連する個人差要因として、先行研究はパーソナリティ特性である Big Five と美的評価との関連について注目してきた。Big Five とは、情緒不安定性 (Neuroticism)、外向性 (Extraversion)、開放性 (Openness)、調和性 (Agreeableness)、誠実性 (Conscientiousness) の 5 つの基本的特性次元からなり、一見多様に見える個人のパーソナリティ特性はこれら 5 つの特性によって表すことができるというモデルである。この 5 つの特性の一つである開放性について、先行研究 (e.g., Chamorro-Premuzic, Burke, Hsu, & Swami, 2010; Chamorro-Premuzic & Furnham, 2004; Chamorro-Premuzic, Reimers, Hsu, & Ahmetoblu, 2009; Feist & Brady, 2004; Furnham & Avison, 1997; Rawlings, 2000; Rawlings, Twomey, Burns, & Morris, 1998) は美的評価として“好み (preference)”を評価語として用い、開放性と視覚芸術に対する好みとの間に安定して正の相関が示される点を見出している。開放性は創造性と関連する構成要素を担っていると考えられて

¹⁰ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2017) . 美的評価の個人差要因——開放性および審美的価値観との関連——, 日本感性工学会論文誌, 16(3), 315-320. 宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2016) . Big Five の開放性と審美的価値観のどちらが絵画の美的評価と強く関連するか?, 日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会, 発表番号 PA14.

いることから (Leutner, Yearsley, Codreanu, Borenstein, & Ahmetoglu, 2017) , 創造的活動の一つである芸術作品の評価と強い関連性を示したと考えられる。

開放性と絵画の美的評価との関連について, McCrae & Sutin (2009) は開放性が6つの側面 (Fantasy, Aesthetic, Feelings, Actions, Ideas, Values) から構成されているとし, その内の一つである価値観 (Values) がとくに美的経験¹¹と関連すると指摘している (Rawlings, Vidal, & Furnham, 2000)。また, 価値観は開放性と関連すると指摘されている (Fayn, Tiliopoulos, & MacCann, 2015) 。これらのことより, 開放性と美的評価との関わりを考える上では, 個人の価値観についても着目する必要がある。

しかしながら, 価値観と開放性のどちらがより強く, あるいは直接的に絵画の美的評価に影響するのかを明瞭にした研究は少ない。

前述の先行研究 (e.g., Chamorro-Premuzic et al., 2010; Chamorro-Premuzic & Furnham, 2004; Chamorro-Premuzic et al., 2009; Feist & Brady, 2004; Furnham & Avison, 1997; Rawlings, 2000; Rawlings et al., 1998) の中で, Chamorro-Premuzic et al. (2009) は開放性と美的評価との関連において媒介過程を仮定している。媒介過程とは, ある独立変数 X と結果変数 Y との間を媒介変数 M (mediator) が介在するというモデルのことで, ある原因と結果との間の心理的プロセスを検討

¹¹ 美的経験とは美術館に行く, 美術品を買うことであることに対し, 美術経験とは美術大学に通う, 造形教室に通うなどのことを本研究では意味する。

できるものである（村山，2009）。Chamorro-Premuzic et al.（2009）は，開放性と美的評価との間には絵画全般（art total）に対する評価という潜在変数が媒介するというモデルを示唆している。すなわち，開放性はまず広範な絵画に対する好みや興味を規定した後に，特定の絵画（e.g., ルネッサンス，印象派，キュビズムの絵画）に対する美的評価を規定するというモデルである。

Chamorro-Premuzic et al.（2009）が開放性と絵画の美的評価との間に潜在変数の存在を仮定している点を踏まえると，開放性は絵画の美的評価を間接的に規定すると考えられる。すなわち，開放性は絵画の美的評価に対して直接的な関連性は弱いものと考えられる。

そこで本研究では，審美的価値観は Big Five の開放性から独立して絵画の美的評価と関連するか検討することを目的とする。結果の予測としては，審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で，開放性はこれらと関連しないと考える。

4.3.2. 方法

実験参加者 首都圏四年制大学心理学科学生のデータを用いた。総回答者数 116 名のうち，回答に欠損の無い 110 名（男性 52 名，女性 58 名，平均年齢 19.47

歳， $SD = 1.19$ 歳) を分析対象とした。

絵画刺激 実験で用いた絵画は，Marković & Radonjić (2008) の研究から抽出された合計 24 枚の絵画を使用した (Figure4.3.1)。



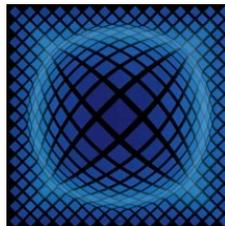
(A) 古代芸術と非西欧芸術の絵画の例



(B) 形態的リアリズムの絵画の例



(C) 様式的リアリズムの絵画の例



(D) 抽象芸術の絵画の例

Figure 4.3.1. Marković & Radonjić (2008) の研究から抽出された 4 カテゴリーの絵画の例

Marković & Radonjić (2008) は、(A) 古代芸術と非西欧芸術 (Ancient and non-Western art), (B) 形態的リアリズム (Figural Realism), (C) 様式的リアリズム (Stylized Realism), (D) 抽象芸術 (Abstract art) の 4 つのカテゴリに絵画を分類した。これら 4 つのカテゴリは、文化、絵画のスタイル、描かれた時代が多様性を含むもので、どのような絵画にも当てはまる普遍的な分類とされる。本論文は、絵画の属性 (e.g., 絵画に描かれている対象やモチーフ) によって美的評価が左右されることについて議論することを目的としていない。そのため、Marković & Radonjić (2008) が分類した多様性のある絵画を刺激として用いることは、絵画の属性によって美的評価が規定されるのを防止できると考えた。

質問紙 絵画に対する美的評価を測定する尺度、**Big Five** の開放性因子を測定する尺度、審美的価値観を測定する尺度の順で綴じた質問紙を用いた。

絵画の美的評価尺度 絵画の美的評価の測定には、筒井他 (2009) で使用された 4 つの形容詞対尺度であった。すなわち、「醜い - 美しい」、「不快な - 快い」、「悪い - 良い」、「嫌いな - 好きな」であった。これら 4 つの形容詞対は、9 段階評定 (左側 : 1 点 - 右側 : 9 点) で回答を求めるものであった。

Big Five 尺度 Big Five の測定には、和田 (1996) の Big Five 尺度を用いた。和田 (1996) の Big Five 尺度は、国内で多く用いられる Big Five 尺度である (並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口, 2012)。本尺度は各因子 12 項目合計 60 の形

容詞で構成されており、文章形式の項目よりも構造が安定して抽出されやすいこと（和田，1996）、他の尺度よりも項目数が少ないため様々な場で活用されやすい（並川他，2012）といった特徴を備えている。

開放性の項目内容は、「独創的な」、「多才の」、「進歩的」、「洞察力のある」、「想像力に富んだ」、「美的感覚の鋭い」、「頭の回転の速い」、「臨機応変な」、「興味の広い」、「好奇心が強い」、「独立した」、「呑み込みの速い」の12項目であった。回答方法は、「まったくあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（7点）」までの7件法であった。

審美的価値観尺度 審美的価値観の測定には、酒井他（1998）の価値志向性尺度を用いた。本尺度は、Spranger（1921）の提唱した6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中で、「審美」を測定する12項目を抜粋して本研究で用いた。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」までの5件法であった。

手続き 授業時間内の一斉調査形式であった。回答の順番は、まず絵画の評定を一斉に実施した後で、Big Fiveと価値観を測定する尺度への回答を求めた。

絵画は教室の大型スクリーンに1枚ずつ呈示し、質問紙の評定尺度へ回答を

求めた。絵画の呈示順序による順序効果を防ぐために、絵画はカテゴリごとではなくランダムに呈示した。なお、絵画1枚の呈示時間は、約20秒であった。教示は以下の通りであった。「今回の研究では、スクリーンに呈示される絵画を見て評価をして頂こうというものです。絵画は全部で24枚となります。その後、質問に答えて頂きます。研究者の指示があるまで、冊子は開かないで下さい。」

参加者全員が絵画評定を終えたことを確認した後、Big Five 尺度、続けて価値志向性尺度の順で回答を求めた。所要時間は、教示も含めて約45分であった。

4.3.3. 結果

まず、24枚の絵画に対する美的評価を測定した4項目（美しさ、快さ、良さ、好ましさ）について、4つのカテゴリごとに形容詞の合計得点を算出した。次に、4項目の得点に一貫性があるかを検討するため、信頼性係数 α を算出した。その結果、いずれのカテゴリも α は.80以上であった（Aカテゴリでは α =.87；Bカテゴリでは α =.88；Cカテゴリでは α =.84；Dカテゴリでは α =.91）。 α が.80以上であれば高い内的整合性を有すると考えられることから（小塩, 2004；Kaplan & Saccuzzo, 2005）、いずれのカテゴリにおいても4項目間の評価は一貫していたといえる。

従って、4項目を合計した美的評価得点を算出した。これらの結果を Table 4.3.1

に示す。また，開放性の得点および審美的価値観の得点について，それぞれ平均値，最小値，中央値，最大値を算出した（Table 4.3.2）。

Table 4.3.1.

4つのカテゴリごとに算出した4項目の形容詞それぞれの合計得点と4項目を合計した美的評価得点の平均値 (N = 110)

		<i>M</i>	<i>SD</i>
Aカテゴリ	美しさ	31.16	4.69
	快さ	31.20	4.58
	良さ	32.35	5.03
	好ましさ	30.61	5.38
	合計	125.33	17.88
Bカテゴリ	美しさ	39.33	5.35
	快さ	35.85	5.09
	良さ	37.85	5.30
	好ましさ	36.79	5.54
	合計	149.81	19.13
Cカテゴリ	美しさ	31.73	4.54
	快さ	30.54	5.18
	良さ	32.35	4.93
	好ましさ	30.65	4.95
	合計	125.26	17.49
Dカテゴリ	美しさ	31.06	5.91
	快さ	29.38	5.31
	良さ	30.61	5.96
	好ましさ	29.45	6.57
	合計	120.44	21.90

※各カテゴリの4項目それぞれの得点範囲・・・6 - 54

※各カテゴリの合計の得点範囲・・・24 - 216

Table 4.3.2.

開放性の得点および審美的価値観の得点についての平均値, 最小値
(*Min*) , 中央値 (*Med*) , 最大値 (*Max*) (*N* = 110)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Med</i>	<i>Max</i>
開放性	40.07	11.92	17	48	81
審美的価値観	40.52	7.55	16	41	58

※開放性の得点範囲・・・12 - 84

※審美的価値観の得点範囲・・・12 - 60

先行研究 (Fayn et al., 2015) によると、開放性と審美的価値観の間には関連性があるとされる。そこで、開放性の得点と審美的価値観の得点の相関分析を行った。その結果、相関係数は $r = .52$ であり、1%水準で有意な中程度の正の相関を示した。

開放性および審美的価値観が絵画の美的評価と関連するかを検討するため、開放性の得点と審美的価値観の得点を説明変数、4つのカテゴリごとに算出した美的評価得点を目的変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。重回帰分析の結果を Table 4.3.3 に示す。なお、説明変数間の相関が強い場合には、目的変数の予測ができなくなる多重共線性の問題が発生する。そこで、多重共線性の問題がないか確認するため、説明変数間の共線性を表す統計量である Variance Inflation Factor (以下、VIF) を算出した。その結果、 $VIF = 1.37$ であった。VIF が 10 を超える場合、多重共線性の可能性が指摘されている (小塩, 2004)。本研究では VIF が 10 を大きく下回っていたことから、多重共線性が存在しないことを確認した。

Table 4.3.3.
重回帰分析による結果 (N = 110)

	説明変数		R^2
	審美的価値観	開放性	
	β	β	
Aカテゴリ	.14	.16	.05
Bカテゴリ	.38**	.02	.15**
Cカテゴリ	.28**	.05	.10**
Dカテゴリ	.32**	-.17	.07**

* : $p < .05$, ** : $p < .01$

重回帰分析の結果、(A) 古代芸術と非西欧芸術の絵画において、重回帰式は有意でなかった ($F(2,107) = 3.72, n. s.$)。 (B) 形態的リアリズムの絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,107) = 9.73, p < .001$)。決定係数は $R^2 = .15$ であった。重回帰式が有意であったことから、説明変数が目的変数に及ぼす影響力の大きさを示す標準偏回帰係数を算出した。その結果、審美的価値観の標準偏回帰係数は有意であった ($\beta = .38, p < .001$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = .02, n. s.$)。 (C) 様式的リアリズムの絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,107) = 5.36, p = .006$)。決定係数は $R^2 = .10$ であった。審美的価値観の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = .28, p = .011$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = .05, n. s.$)。 (D) 抽象芸術の絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,107) = 4.24, p = .017$)。決定係数は $R^2 = .07$ であった。審美的価値観の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = .32, p = .004$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = -.17, n. s.$)。

4.3.4. 考察

研究 6a の目的は、審美的価値観は開放性から独立して絵画の美的評価と関連するかについて検討することであった。

まず、開放性と審美的価値観との関係について議論する。相関分析の結果、開

開放性の得点と審美的価値観との得点に中程度の相関が認められたことから、開放性と審美的価値観は相互に関係していることが示唆された。価値観といった個人差は開放性と関連するという Fay et al. (2015) の指摘を踏まえると、本研究の結果は Fay et al. (2015) の指摘を支持するものといえよう。従って、審美的価値観と開放性というパーソナリティ特性にはある程度の関連があるものといえる。

次に、重回帰分析の結果、絵画の 4 カテゴリーの内、(B) 形態的リアリズム、(C) 様式的リアリズム、(D) 抽象芸術の 3 つのカテゴリで審美的価値観と美的評価に有意な関連が認められた。一方、(A) 古代芸術と非西欧芸術のカテゴリのみ審美的価値観と関連が認められなかった。この点に関して、(A) カテゴリの絵画には、アニメのような絵画や浮世絵が含まれていた。そのため、これらの絵画は絵画として判断されなかったもの、すなわち絵画カテゴリ化が生じなかったものだと考えられる。研究 1 より、審美的価値観と絵画カテゴリ化との間に正の相関が認められた点を踏まえると、(A) カテゴリの絵画は絵画カテゴリ化が生じなかったため、審美的価値観と関連がなかったと推察される。

本研究の結果から、開放性と美的評価との直接の関連は認められなかった。この結果は、開放性と視覚芸術に対する美的評価との関連を示した先行研究 (e.g., Chamorro-Premuzic et al., 2010; Chamorro-Premuzic & Furnham, 2004; Chamorro-

Premuzic et al., 2009; Feist & Brady, 2004; Furnham & Avison, 1997; Rawlings, 2000; Rawlings et al., 1998) の知見と一致しないものである。この点を踏まえると、開放性と美的評価との関連は一貫性が弱いものであると考えられる。木下 (2004) によれば、パーソナリティは、対象となる個体とその個体がおかれた状況との関係において、共変動する両者の関係によって多元的に構造化されるものであると指摘している。この点を踏まえると、パーソナリティの一つである開放性も、多元的構造であると考えられる。すなわち、開放性は個人がおかれた状況によって変化する様々な要素が絡み合っ構成され、それら構成要素から多元的に形成される個人差要因であるといえる。これは、開放性はとても広範な要素から構成されているという MaCrae & Sutin (2009) の指摘と一致する。そのため、個体のおかれた状況によって、これら要素と美的評価との関連が変動するので、一貫性が弱くなると推察される。従って、開放性と美的評価との関連性は、一貫性が弱いものであるといえる。

これらのことより、開放性は絵画の美的評価に対して直接的影響は及ぼさない個人差要因だと考えられる。これまでの先行研究は、開放性が絵画の美的評価に直接影響することを検討していたとは断定しにくい。また、本研究の結果からは、開放性と絵画の美的評価との直接的影響は重回帰分析から見出されなかった。これらを踏まえると、絵画の美的評価に直接的な影響を及ぼす個人差要因は、

開放性よりも審美的価値観であると考えられるだろう。

本研究より，開放性よりも審美的価値観の方が絵画の美的評価と強く関連することが示唆された。Big Five 因子と芸術作品との相互関係に注目した研究はまだ始まって間もないため (Swami & Furnham, 2012)，本研究はそうした相互関係を理解する上で知見の集積に寄与すると考えている。

4.4. 研究 6b : 研究 6a の再現可能性の検討¹²

4.4.1. 目的

研究 6a は、開放性と審美的価値観のどちらが絵画の美的評価とより強く関連するかを重回帰分析により検証した。その結果、絵画のカテゴリによって傾向は異なる部分があるものの、総じて開放性よりも審美的価値観の方が美的評価に強い影響を及ぼすことが示唆された。

しかしながら、研究 6a は心理学科の学生を対象に研究を行っていた。この点を踏まえ、研究 6b は心理学科以外の学生も対象として調査を行うことにより、研究 6a の再現可能性を確認することを目的とした。具体的には、理系の学生を対象として調査を実施した。

4.4.2. 方法

実験参加者 首都圏四年制大学大学生のデータを用いた。総回答者数 326 名

¹² 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。宮下 達哉・白川 真裕・木村 敦・岡 隆 (2018). Big Five の開放性と美的評価との関連——媒介変数として審美的価値観に着目して——, 日本感性工学会論文誌, 17(2), 251-256. 宮下 達哉・白川 真裕・木村 敦・岡 隆 (2017). パーソナリティの開放性と美的評価との関連——媒介変数として審美的価値観に着目して——, 第 19 回日本感性工学会大会, 発表番号 P03. 宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2017). 開放性と審美的価値観の階層構造に関する一考察, 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 21.

のうち、回答に欠損の無い 323 名（平均年齢 19.47 歳， $SD = 1.19$ 歳）を分析対象とした。調査対象者の内訳は、理工学部の学生 209 名，教育学部の学生 72 名，心理学部の学生 42 名であった。

絵画刺激 実験で用いた絵画は、研究 6a と同様の絵画であった。すなわち、Marković & Radonjić (2008) の研究から抽出された合計 24 枚の絵画を使用した。

質問紙 絵画に対する美的評価を測定する尺度、Big Five の開放性因子を測定する尺度、審美的価値観を測定する尺度の順で綴じた質問紙を用いた。

絵画の美的評価の測定には、筒井他 (2009) で使用された 4 つの形容詞対尺度であった。すなわち、「醜い - 美しい」、「不快な - 快い」、「悪い - 良い」、「嫌いな - 好きな」であった。これら 4 つの形容詞対は、9 段階評定（左側：1 点 - 右側：9 点）で回答を求めるものであった。

Big Five の測定には、和田 (1996) の Big Five 尺度を用いた。和田 (1996) の Big Five 尺度は、国内で多く用いられる Big Five 尺度である（並川他，2012）。本尺度は各因子 12 項目合計 60 の形容詞で構成されており、文章形式の項目よりも構造が安定して抽出されやすいこと（和田，1996）、他の尺度よりも項目数が少ないため様々な場で活用されやすい（並川他，2012）といった特徴を備えている。

開放性の項目内容は、「独創的な」、「多才の」、「進歩的」、「洞察力のある」、「想

像力に富んだ」、「美的感覚の鋭い」、「頭の回転の速い」、「臨機応変な」、「興味の広い」、「好奇心が強い」、「独立した」、「呑み込みの速い」の 12 項目であった。回答方法は、「まったくあてはまらない (1 点)」から「非常にあてはまる (7 点)」までの 7 件法であった。

審美的価値観の測定には、酒井他 (1998) の価値志向性尺度を用いた。本尺度は、Spranger (1921) の提唱した 6 種の価値観 (理論・経済・審美・宗教・社会・権力) を全 72 項目で測定するものである。その中で、「審美」を測定する 12 項目を抜粋して本研究で用いた。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は、「あてはまらない (1 点)」から「あてはまる (5 点)」までの 5 件法であった。

手続き 授業時間内の一斉調査形式であった。回答の順番は、まず絵画の評定を一斉に実施した後で、Big Five と価値観を測定する尺度への回答を求めた。

絵画は教室の大型スクリーンに 1 枚ずつ呈示し、質問紙の評定尺度へ回答を求めた。絵画の呈示順序による順序効果を防ぐために、絵画はカテゴリごとではなくランダムに呈示した。なお、絵画 1 枚の呈示時間は、約 20 秒であった。教示は以下の通りであった。「今回の研究では、スクリーンに呈示される絵画を見て評価をして頂こうというものです。絵画は全部で 24 枚となります。その後、

質問に答えて頂きます。研究者の指示があるまで、冊子は開かないで下さい。」

参加者全員が絵画評定を終えたことを確認した後、Big Five 尺度、続けて価値志向性尺度の順で回答を求めた。所要時間は、教示も含めて約 45 分であった。

4.4.3. 結果

まず、24 枚の絵画に対する美的評価を測定した 4 項目（美しさ、快さ、良さ、好ましさ）について、4 つのカテゴリごとに形容詞の合計得点を算出した。次に、4 項目の得点が一貫して測定していたかを検討するため、信頼性係数 α を算出した。その結果、研究 6 から示された結果と同様に、いずれのカテゴリも α は .80 以上であった（A カテゴリでは $\alpha = .85$; B カテゴリでは $\alpha = .87$; C カテゴリでは $\alpha = .85$; D カテゴリでは $\alpha = .87$ ）。従って、4 項目を合計した美的評価得点を算出した。これらの結果を Table 4.4.1 に示す。

Table 4.4.1.

4つのカテゴリごとに算出した4項目の形容詞それぞれの合計得点と4項目を合計した美的評価得点の平均値 (N = 323)

		<i>M</i>	<i>SD</i>
Aカテゴリ	美しさ	31.29	4.75
	快さ	31.50	4.97
	良さ	32.90	5.23
	好ましさ	31.31	5.67
	合計	127.01	18.43
Bカテゴリ	美しさ	40.96	5.45
	快さ	36.89	5.61
	良さ	39.26	5.71
	好ましさ	38.23	5.90
	合計	155.33	20.06
Cカテゴリ	美しさ	32.44	4.86
	快さ	31.20	5.08
	良さ	31.92	5.79
	好ましさ	32.09	5.58
	合計	127.65	18.59
Dカテゴリ	美しさ	32.21	5.43
	快さ	31.00	5.47
	良さ	31.92	5.79
	好ましさ	31.89	6.29
	合計	127.02	20.71

※各カテゴリの4項目それぞれの得点範囲・・・6 - 54

※各カテゴリの合計の得点範囲・・・24 - 216

次に、開放性の得点および審美的価値観の得点について、それぞれ平均値を算出した（Table 4.4.2）。

Table 4.4.2.

開放性および審美的価値観の合計得点の各平均値 (N = 323)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
開放性	48.65	10.21
審美的価値観	41.05	7.92

※得点範囲：開放性・・・12 - 84

※得点範囲：審美的価値観・・・12 - 60

さらに、開放性および審美的価値観が絵画の美的評価へ影響するかを検討するため、開放性および審美的価値観の得点を説明変数、4つのカテゴリごとに算出した美的評価得点を目的変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。重回帰分析の結果を Table 4.4.3 に示す。なお、説明変数間の相関が強い場合には、目的変数の予測ができなくなる多重共線性の問題が発生する。そこで、多重共線性の問題がないか確認するため、説明変数間の共線性を表す統計量である Variance Inflation Factor（以下、VIF）を算出した。その結果、 $VIF = 1.14$ であった。VIF が 10 を超える場合、多重共線性の可能性が指摘されている（小塩, 2014）。本研究では VIF が 10 を大きく下回っていたことから、多重共線性が存在しないことを確認した。

Table 4.4.3.

重回帰分析による結果 (N = 323)

	説明変数		
	審美的価値観	開放性	R^2
	β	β	
Aカテゴリ	.23**	-.02	.05**
Bカテゴリ	.31**	.02	.10**
Cカテゴリ	.30**	.04	.10**
Dカテゴリ	.23**	-.10	.05**

** : $p < .01$

重回帰分析の結果、(A) 古代芸術と非西欧芸術の絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,320) = 8.21, p < .001$)。決定係数は $R^2 = .05$ であった。審美的価値観の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = .23, p < .001$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = -.02, n.s.$)。(B) 形態的リアリズムの絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,320) = 18.37, p < .001$)。決定係数は $R^2 = .10$ であった。審美的価値観の標準偏回帰係数は有意であった ($\beta = .31, p < .001$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = .02, n.s.$)。

(C) 様式的リアリズムの絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,320) = 17.11, p < .001$)。決定係数は $R^2 = .10$ であった。審美的価値観の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = .30, p < .001$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = .04, n.s.$)。(D) 抽象芸術の絵画において、重回帰式は有意であった ($F(2,320) = 8.16, p < .001$)。決定係数は $R^2 = .05$ であった。審美的価値観の標準偏回帰係数が有意であった ($\beta = .23, p < .001$)。一方で、開放性の標準偏回帰係数は有意でなかった ($\beta = -.10, n.s.$)。

4.4.4. 考察

研究 6b の目的は、研究 6a の再現可能性の検討であった。すなわち、心理学科の学生のみならず理系の学生も対象として、審美的価値観は開放性から独立し

て絵画の美的評価と関連するか検討することを目的とした。

重回帰分析の結果、審美的価値観と 4 つのカテゴリにおける美的評価との関連は認められたが、開放性とこれらの美的評価との関連は認められなかった。従って、審美的価値観は絵画の美的評価を規定するが、開放性はこれらを規定しないことが示された。この結果は、研究 6a の結果を支持するものであり、研究 6a から得られた知見の再現可能性を示唆するものであった。

4.5. 総合考察

第4章は、審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討するために、4つの研究を実施した。

研究4は、審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価を規定するか検討した。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、既知性はこれらと関連しなかった。

研究5は、審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。調査では、美大生と一般学生を対象とすることにより、美術経験の有無を比較した。その結果、美大生と一般学生どちらの群においても、審美的価値観が高い人は低い人よりも抽象画および具象画に対する美的評価が高いことが示された。

研究6aおよび6bは、審美的価値観は開放性から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。

研究4、研究5、研究6a、6bの結果より、審美的価値観は、その他の個人差要因、すなわち、絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連することが示唆された。

第5章 総括

5.1. 本論文における実証研究の結果の概要

本研究は、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連することを一貫して検討したものであった。

総合的研究より明らかになったこととして、研究1は、絵画カテゴリ化された絵画と審美的価値観とは関連することが示された。研究2および3によって、審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず、絵画に対する美的評価と関連することが示唆された。具体的には、絵画に描かれている内容が美しいものあるいは醜いものどちらであっても、また、絵画に描かれている内容が具象画あるいは抽象画のどちらであっても、それらの内容の違いに左右されず、審美的価値観は絵画に対する美的評価と関連することが示唆された。研究4から6bは、審美的価値観は他の個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価と関連することが示唆された。具体的には、絵画の既知性、美術経験の有無、Big Fiveの開放性から独立して、審美的価値観は絵画に対する美的評価と関連することが示唆された。

第2章の研究1は、絵画カテゴリ化と審美的価値観との関連について検討した。

研究 1 の結果、審美的価値観と絵画カテゴリ化との間に有意な関連がみられた。この結果より、審美的価値観の高い者は、一見して絵画と判断し難い視覚的対象に対しても、それを絵画である判断することが示唆された。

第 3 章の研究 2 および研究 3 は、審美的価値観は絵画に描かれている内容に左右されず、絵画の美的評価と関連するかについて検討を行った。

研究 2 は、絵画に描かれている内容の美醜と美的評価との関連を検討した。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に描かれている内容が美しいもの及び醜いもののどちらであっても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

研究 3 は、具象画・抽象画に対する美的評価と審美的価値観との関連を検討した。その結果、審美的価値観の高い人は低い人よりも、抽象画と具象画どちらに対しても、絵画に対する美的評価が高いことが示された。

第 4 章の研究 4 から研究 6b は、審美的価値観は他の美的評価を規定する個人差要因に左右されず、絵画に対する美的評価を規定するか検討した。具体的には、他の個人差要因として、絵画の既知性、美術経験の有無、Big Five の開放性に着目した。

研究 4 は、審美的価値観は絵画の既知性から独立して絵画の美的評価を規定するか検討した。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、

既知性はこれらと関連しなかった。

研究 5 は、審美的価値観は美術経験の有無から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。その結果、美大生と一般学生どちらの群においても、審美的価値観が高い人は低い人よりも抽象画および具象画に対する美的評価が高いことが示された。

研究 6a は、審美的価値観は開放性から独立して絵画の美的評価と関連するか検討した。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。

研究 6b は、研究 6a の再現可能性を検討した。研究 6a で対象とした調査参加者は心理学科の学生のみが対象であったため、心理学科以外の学生も調査対象とすることで、研究 6a の追試調査を行った。その結果、審美的価値観は絵画の美的評価と関連する一方で、開放性はこれらと関連しなかった。この結果は、研究 6a の結果を支持するものであり、研究 6a から得られた知見の再現可能性を示すものであった。

先行研究は、絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性によって美的評価が左右されるということが指摘されてきた。また、絵画を見たことあるという既知性が絵画に対する美的評価を高めるということや、美術経験の有無および開放性の高低が抽象画・具象画に対する美的評価との関連の様相に違いを

生じさせると指摘されてきた。

これら先行研究の知見に比して、本論文は審美的価値観が絵画に対する美的価値を規定するという新たな知見を提示した。すなわち、審美的価値観を重視する人はそうでない人よりも、先行研究で指摘がされてきた要因から独立して、絵画に対する美的評価が高くなることが明らかとなった。

5.2. 本論文の意義と今後の展望

これまで、美術作品の鑑賞構造に最も強く影響する要因の一つとして考えられていたものは、美術経験の有無であった（井上他，2005）。歴史的にも、美的評価に影響を及ぼす個人差要因として美術・造形教育が取り上げられることが多かった（e.g., Burt, 1933 ; Carey et al., 2015）。

一方、本研究は、審美的価値観と美術教育の両者が美的評価に及ぼす影響を、具象画と抽象画といった複数の評価属性を扱って包括的に検討し、美術経験よりも審美的価値観の方が絵画の美的評価における個人差に及ぼす影響が大きいことを示した。美術経験という単一の経験要因のみならず、審美的価値観も絵画の美的評価と関連する個人差要因となるという本研究の知見は、美的評価における個人差の議論の発展に寄与する可能性があるだろう。

価値観とパーソナリティとの関連について、これらの構成概念の関連性は厳密に区別することは難しいとされてきた（木下，2004）。一方、本研究は、絵画の美的評価における個人差という観点から、審美的価値観は Big Five の開放性から独立することが明らかとなり、価値観とパーソナリティとの関連性についての新たな知見を提示したといえよう。

また、高橋・山形・星野（2011）によれば、パーソナリティ特性研究の重要な

点は、パーソナリティ特性から何を予測できるのかという予測的妥当性にあると述べている。さらに、パーソナリティ特性から予測できる従属変数が、心理学的構成概念のみに留まらず、他領域まで広げることの重要性についても指摘している。Big Fiveの開放性および審美的価値観の2つの個人差要因と絵画の美的評価との関連性について検討した本研究は、心理学領域のみならずひろく感性評価に関わる領域まで広がる基礎的知見として寄与すると考えられる。

最後に、今後の展望について述べる。専門レベルでの芸術の教育場面では、学生は授業時間という制約上、表現活動に集中することが求められる。そのため、他者の作品をじっくりと鑑賞するゆとりがないことが指摘されている(生田目・松田, 2016)。しかしながら、近年、鑑賞と表現は相互に関わりがあることが指摘され始めている(Tinio, 2013)。この点について、岡田(2013)は、鑑賞によって他者作品から情報を得ることは、鑑賞者に対して新しい表現を行うためのイメージやアイデアの形成を促し、さらに新しい表現を生むことにつながると述べている。本研究は鑑賞者の個人差に焦点を当てたものであるが、美的評価の個人差要因として着目した審美的価値観が芸術の表現とどう関連するか精緻に検討し、美術教育分野における鑑賞構造の理解の一助となることが望まれる。

5.3. 本論文の限界点

本論文の限界点について述べる。本研究は、審美的価値観と絵画に対する美的評価との関連について、以下の2つの論点から検討することを目的とした。すなわち、①審美的価値観は絵画に描かれている内容の美醜および具象性・抽象性に左右されず美的評価と関連するか検討すること、②審美的価値観は絵画の既知性、美術経験、開放性に左右されず絵画の美的評価と関連するか検討することであった。この2点の論点から検討した結果、審美的価値観の高い者は低い者に比べて、絵画に対する美的評価が高いことが一貫して示され、審美的価値観と絵画に対する美的評価との関連が示唆された。

しかしながら、絵画に描かれている内容や他の個人差要因に左右されないといったように、関連がないことを実証的に示すことは難しい。すなわち、関連があることを実証するためには、ある実証を示せばよいが、関連がないことを実証するには、どれだけ実例を示しても、それ以外にある可能性が否定できないために、厳密に言えば実証することは不可能に近い。

つまり、個人差は関連がないのではなく、本研究で扱った変数に限った議論であり、また、効果量やサンプルサイズの制約といった統計的な判断からは有意にならなかったが、非常に弱い関連はある可能性も考えられる。さらに、審美的価値観と絵画に描かれている内容および他の個人差要因との関連は、別の変数に

媒介あるいは調整されることによって関連が見出される可能性も考えられる。
従って、今後は本研究で扱った変数以外も扱って包括的に検討する必要がある
といえる。

引用文献

Arakawa, A. (2016). Japanese history of the psychology of fine arts and aesthetics.

Japanese psychological research, 58, 56-69.

Augustin, M. D. & Leder, H. (2006). Art expertise: A study of concepts and conceptual

spaces. *Psychology science, 48, 135-156.*

Berlyne, D. E. (1974). Studies in the new experimental aesthetics: steps toward an

objective psychology of aesthetic appreciation. Washington, DC: Hemisphere.

Burt, C. (1933). How the mind works. London: Allen and Unwin.

Bornstein, F. R. & D'Agostino, R. P. (1992). Stimulus recognition and the mere exposure

effect. *Journal of personality and social psychology, 63, 545-552.*

Carey, D., Rosen, S., Krishnan, S., Pearce, T. M., Shepherd, A., Aydelott, J., & Dick, F.

(2015). Generality and specificity in the effects of musical expertise on perception and cognition. *Cognition, 137, 81-105.*

Cohen, A., & Hodges, H. (1963). Characteristics of the lower- blue-collar class, *Social*

Problems, 10, part 4.

Cupchik, G. C., & Gebotys, R. (1988). The experience of time, pleasure and interest

during aesthetic episodes. *Empirical Studies of the Arts, 6, 1-12.*

Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R. (1992). Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-

R) and NEO Five-Factor Inventory(NEO-FFI) manual. Odessa, FL : Psychological Assessment Resources.

Chamorro-Premuzic, T., & Furnham, A. (2004). Art judgment: A measure related to both personality and intelligence? *Imagination, Cognition, and Personality, 24*, 3-24.

Chamorro-Premuzic, T., Reimers, S., Hsu, A., & Ahmetoglu, G. (2009). Who art thou? Personality predictors of artistic preferences in a large UK sample: The importance of openness. *British Journal of Personality, 100*, 501-516.

Chamorro-Premuzic, T., Burke, C., Hsu, A., & Swami, V. (2010). Personality predictors of artistic preferences as a function of the emotional valence and perceived complexity of paintings. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts, 4*, 196-204.

Eysenck, H. J. (1940). The general factor in aesthetic judgments. *British Journal of Psychology, 31*, 94-102.

Eysenck, H. J. (1942). The experimental study of the 'Good Gestalt'. *Psychological Review, 49*, 344-364.

Feist, G.J., & Brady, T.R. (2004). Openness to experience, non-conformity, and the preference for abstract art. *Empirical Studies of the Arts, 22*, 77-89.

Finn, S. (1997). Origins of media exposure: Linking personality traits to TV, radio, print,

- and film use. *Communication Research*, 24, 507–523.
- Furnham, A., & Avison, M. (1997). Personality and preference for surreal paintings. *Personality and Individual Differences*, 23, 923-935.
- Furnham, A., & Chamorro-Premuzic, T. (2004). Personality, intelligence, and art. *Personality and Individual Differences*, 23, 923-935.
- Fayn, K. Tiliopoulos, N., & MacCann, C. (2015). Interest in truth versus beauty: Intellect and Openness reflect different pathways towards interest. *Personality and Individual Differences*, 81, 47-52.
- Goldberg, L. R. (1993). The structure of phenotypic personality traits. *American Psychologist*, 48, 26-34.
- 本田 悟郎 (2012) . 鑑賞における美的経験とコミュニケーション——アートプロジェクトの創造的価値—— 環境芸術, 11, 80-86.
- Hekkert, P., & van Wieringen, P.C.W. (1990). Complexity and prototypicality as determinants of the appraisal of cubist paintings. *British journal of Psychology*, 81, 438-495.
- Hekkert, P., & van Wieringen, P.C.W. (1996a). Beauty in the eye of expert and nonexpert beholders: A study in the appraisal of art. *American journal of Psychology*, 109, 389-407.

Hekkert, P., & van Wieringen, P.C.W. (1996b). The impact of level on the evaluation of original and altered version of post-impressionistic paintings. *Acta Psychologica*, *94*, 117-131.

石橋 伸介・曾我部 春香・森田 昌嗣 (2013) . パーソナルモビリティの価値要素および価値構造の把握——クオリティカル評価・診断システム構築に関する研究 (5) —— デザイン学研究, *60*, 21-28.

井上 征矢・穂積 毅重・玉川 信一・五十殿 利治 (2005) . 美術作品の鑑賞構造に関する一考察——美術館来館者を対象としたアンケート調査を通して—— 日本感性工学会論文誌, *5*, 17-24.

Jacoby, L. L., & Kelly, C. M. (1987). Unconscious influences of memory for prior events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *13*, 314-336.

車 貞玖 (2005). 美術の専門学習は色と形の選好に影響を及ぼすのか 日本大学心理学研究, *26*, 45-52

Kaplan, R. M., & Saccuzzo, D. P.(2005). *Psychological testing: Principles, applications, and issues* (6th ed.). Belmont, CA: Wadsworth/Thomson Learning.

Kawabata, H., & Zeki, S. (2004). Neural correlates of beauty. *Journal of Neurophysiology*, *91*, 1699-1705.

木下 富雄 (2004). 社会心理学から見たパーソナリティ研究 パーソナリティ研

究, 13, 120-125.

Kirk, U., Harvey, A., & Montague, P. R. (2011). Domain expertise insulates against judgment bias by monetary favors through a modulation of ventromedial prefrontal cortex. *PNAS*, 108, 10332-10336.

Kluckhohn, C. (1951). Values and value orientations in the theory of action. In T. Parsons, & E. A. Shils(Eds.), *Toward a general theory of action*. (pp.388-433). Cambridge MA: Harvard University Press.

Knapp, R.H., Brimenr, J., & White, M. (1959). Educational level, class status and aesthetic preference. *Journal of Social Psychology*, 50, 277-284.

Kraaykamp, G., and van Eijck, K. (2005). Personality, media preferences, and cultural participation. *Personality and Individual Differences*, 38, 1675–1688.

久保田 健市 (2002) . 価値観・社会的態度. 堀 洋道 (監) , 吉田 富士雄 (編)
心理測定尺度集Ⅱ (pp.366-376) . サイエンス社

Leutner, F., Yearsley, A., Codreanu, S., Borenstein, Y., & Ahmetoglu, G. (2017). From Likert scales to images: Validating a novel creativity measure with image based response scales. *Personality and Individual Differences*, 106, 36-40.

Marković, S., & Radonjić, A. (2008). Implicit and explicit Features of paintings. *Spatial Vision*, 21, 229-259.

McCrae, R. R., & Sutin, A. R. (2009). Openness to Experience. In M. R. Leary and R. H. Hoyle(Eds.), *Handbook of Individual Differences in Social Behavior*(pp. 257-273). New York: Guilford.

宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2015). 審美的価値観と美的評価の関係についての
実験的検討—抽象画と具象画に注目した場合— 日本感性工学会第17回大会.

宮下 達哉, 木村 敦, 岡 隆 (2016a). 審美的価値観と美的評価の関係について
の実験的検討——ヘドニックトーンと認知的美の評価に着目して—— デ
ザイン学研究, 63, 25-32.

宮下 達哉, 木村 敦, 岡 隆 (2016b). 審美的価値観と美的評価の関係について
の実験的検討 (2) ——美大生と一般大学生の比較—— 日本大学心理学研
究, 37, 28-36.

宮下 達哉・木村 敦・岡 隆 (2017). 美的評価の個人差要因——開放性および審
美的価値観との関連—— 日本感性工学会論文誌, 16, 315-320.

宮下 達哉・白川 真裕・木村 敦・岡 隆 (2018). Big Five の開放性と美的評価
との関連——媒介変数として審美的価値観に着目して—— 日本感性工学
会論文誌, 17, 251-256.

村山 航 (2009). 媒介分析・マルチレベル媒介分析, 1-14.
(<http://koumurayama.com/koujapanese/mediation.pdf>)

- 村山 久美子 (1988). 視覚芸術の心理学 誠信書房
- 生田目 美紀・松田 昇 (2016). 美術教育のためのピアレビュー学習システムの
開発と実践, 日本感性工学会論文誌, 15, 425-430
- 並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之 (2012). Big Five
尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 仲谷 洋平・藤本 浩一 (1984). パターンの良さ及び好みの判断について——美
術群と非美術群の比較—— 関西心理学会第 96 回大会発表論文集, 9.
- 近江 源太郎 (1986). 絵画嗜好とパーソナリティ特性 デザイン学研究, 55, 76.
- 岡田 守弘・井上 純 (1991). 絵画鑑賞における芸術性評価要素に関する心理学
的分析 横浜国立大学教育紀要, 31, 45-66.
- 岡田 猛 (2013). 芸術表現の捉え方についての一考察——「芸術の認知科学」特
集号の序に代えて—— 認知科学, 20, 10-18.
- 小塩真司 (2004). SPSS と Amos による心理・調査データ解析 第 2 版——因子
分析・共分散構造分析まで——, 東京図書株式会社.
- Osgood, C. E., Suci, G., & Tannenbaum, P. H. (1957). The Measurement of Meaning.
University of Illinois Press.
- Osgood, C. E. (1960). The cross-cultural generality of visual-verbal synesthetic
tendencies. *Behavioral Science*, 5, 146-169.

- Rawlings, D. (2000). The interaction of openness to experience and schizotypy in predicting preference for abstract and violent paintings. *Empirical Studies of Arts*, 18, 69-91.
- Rawlings, D., Twomey, F., Burns, E., & Morris, S. (1998). Personality, creativity, and aesthetic preference: Comparing psychoticism, sensation seeking, schizotypy, and openness to experience. *Empirical Studies of Arts*, 16, 153-178.
- Rawlings, D., Vidal, N. B., & Furnham, A. (2000). Personality and aesthetic preference in Spain and England: Two studies relating sensation seeking and openness to experience to liking for paintings and music. *European Journal of Personality*, 14, 553-576.
- Reber, R., Schwartz, N., & Winkielman, P. (2004). Processing fluency and aesthetic pleasure; Is beauty in the perceiver's processing experience? *Personality and Social Psychology Review*, 8, 364-382.
- 李 艶 (2008). 価値観の構成要因についての研究——中国版価値観尺度作成の試みと中国人の普通的価値観エティックの検討—— 聖泉論叢, 16, 31-39.
- カール・ローゼンクランツ (2007) . 醜の美学, 鈴木芳子訳, 未知谷.
- 酒井 恵子 (2001). 価値概念の個人差とその背景——価値尺度作成課題における検討—— 教育心理学研究, 49, 102-111.

- 酒井 恵子・久野 雅樹 (1997). 価値志向的精神作用尺度の作成 教育心理学研究, 45, 388-395.
- 酒井 恵子・Takuya Yanagida・松居 辰則・戸田 有一 (2018). 価値志向性尺度における尺度項目間の順序関係の分析 教育心理学研究, 66, 1-13.
- 酒井 恵子・山口 陽弘・久野 雅樹 (1998). 価値志向性尺度における一次元的階層性の検討——項目反応理論の適用—— 教育心理学研究, 46, 153-162.
- 坂野 朝子・武藤 崇 (2012). 「価値」の機能とは何か——実証に基づく価値研究についての展望——, 心理臨床科学, 2, 69-80.
- Scherer, K.R. (1987). Toward a dynamic theory of emotion: The component process model of affective states. *Geneva Studies in Emotion and Communication, 1*, 1-98.
- Schmidt, J. A., McLaughlin, J. P., & Leighten, P. (1989). Novice Strategies for Understanding Paintings. *Applied Cognitive Psychology, 3*, 91-100.
- Solso, R.L. (2003). *The Psychology of Art and the Evolution of Cambridge, Mass.:* MIT Press.
- Spranger, E. (1921). *Lebensformen: Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit. 2. Aufl. Tübingen: Max Niemeyer.* (シュプランガー E. 伊勢田 耀子 (訳) 1961 文化と性格の諸類型 明治図書)
- Swami, V. (2009). The effect of shape and colour symmetry on the aesthetic value of

- Dayak masks from Borneo. *Imagination, Cognition, and Personality*, 28, 283-294.
- Swami, V., & Furnham, A. (2012). The effects of symmetry and personality on aesthetic preferences. *Imagination, Cognition and Personality*, 32, 41-57.
- Swami, V. & Furnham, A. (2014). Personality and aesthetic experiences. Tinio, P. P. L., & Smith, J. K.(Eds.), *The Cambridge Handbook of the Psychology of Aesthetics and the Arts* (pp.540-561): Cambridge University Press.
- Swami, V., Malpass, F., Havard, D., Benford, K., Costescu, A., Sofitiki, A., & Taylor, D. (2013). Metalheads: The influence of personality and individual differences on preference for heavy metal. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 7, 377-383.
- Swami, V., Stieger, S., Pietschnig, J., & Voracek, M. (2010). The disinterested play of thought: Individual differences and preference for surrealist motion pictures. *Personality and Individual Differences*, 48, 855–859.
- 田島 祥・坂元 章 (2012). 教育番組に含まれる価値観に関する内容分析 教育情報研究, 28, 3-13.
- 高橋 雄介・山形 伸二・星野 崇宏 (2011) . パーソナリティ特性研究の新展開と経済学・疫学など他領域への貢献の可能性 心理学研究, 82, 63-76.
- 高野 陽太郎 (2008). 剰余変数の統制 高野 陽太郎・岡 隆 (編) 心理学研究法

——心を見つめる科学のまなざし (pp.90-119). 有斐閣アルマ

Tinio, P. P. (2013). From artistic creation to aesthetic reception: The mirror model of art.

Psychology of aesthetic, creativity, and the arts, 7, 265.

Tinio, P. P. L., & Smith, J. K.(Eds.), *The Cambridge Handbook of the Psychology of*

Aesthetics and the Arts (pp. 540-561): Cambridge University Press.

筒井 亜湖 (2007). 美的判断の心理構造 女子美術大学大学院美術研究科修士論

文 (未刊行).

筒井 亜湖・近江 源太郎 (2009). 視覚造形における美的評価尺度の検討 女子美

術大学研究紀要, 39, 96-105.

筒井 亜湖・新堀 孝明・近江 源太郎 (2009). 絵画評価における新奇性とヘドニ

ックトーン 基礎造形, 18, 7-12.

筒井 亜湖・近江 源太郎 (2010). 視覚造形における理解度と美的評価 デザイン

学研究, 57, 11-18.

Uusitalo, L., Simola, J., & Kuisma, J. (2012). Consumer Perception of Abstract and

Representational Visual Art. *International journal of Arts Management*, 15, 30-41.

和田 さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究,

67, 61-67.

和田 有史・續木 大介・山口 拓人・木村 敦・山田 寛・野口 薫・大山 正 (2003).

SD 法を用いた視覚研究——知覚属性と感情効果の研究を例として——

Vision, 15, 179-188.

Winkielman, P., & Cacioppo, J. T. (2001). Mind at ease puts a smile on the face:

Psychophysiological evidence that processing facilitation elicits positive affect.

Journal of Personality and Social Psychology, 81, 989-1000.

Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of personality and*

social psychology monograph, 9, 1-27.

謝 辞

本研究を学位論文として纏めるにあたり、多くの先生方、研究室の先輩・同僚・後輩、友人から暖かいご支援をいただいた。すべてのお名前を挙げることはできないが、ここに記して謝意を表したい。

主査をご担当いただいた岡隆教授（日本大学文理学部）から、本研究の遂行から本論文の執筆に至るまで、そして、研究者としての心構えについて、懇切丁寧なご指導とご鞭撻を賜った。ときに教えを理解できない不出来な学生であった私に対して、岡隆教授は厳しくも、寛容であった。また、日頃から研究の進捗状況を気にかけて頂き、精神的な支えも賜った。ここに、岡隆教授に対して深甚たる感謝の意を表したい。

副査をご担当いただいた坂本真土教授（日本大学文理学部）には、本論文の執筆について懇切丁寧なご指導を賜った。また、リサーチミーティングで私の発表した研究について、日頃より貴重な御意見をいただいた。また、副査をご担当いただいた羽生和紀教授（日本大学文理学部）にも、本論文の執筆について懇切丁寧なご指導を賜った。先生方には心より御礼申し上げます。

木村敦准教授（日本大学危機管理学部）には、本論文執筆のご指導だけに留まらず、研究ミーティング後の食事の用意まで、甚大なサポートをいただいた。深く御礼申し上げます。

長瀬容江氏（九州大学病院メディカル・インフォメーションセンター）から、本研究へのご助言から本研究で使用した絵画のご提供に至るまで、多くのご助力をいただきました。また、筒井亜湖先生（多摩美術大学非常勤講師）から、本研究で使用した絵画をご提供していただきました。また、白川真裕氏（日本大学文理学部人文科学研究所研究員）から、本研究に関する多くのご助言をいただきました。ここに記して、心より感謝申し上げたい。

岡隆研究室ならびに坂本真士研究室の皆さまから、本研究に対する様々なご助言をいただき、精神的にも支えていただきました。心より御礼申し上げます。

故・山田寛教授（日本大学文理学部）には、大学院に進学して研究に勤しめる契機を与えていただきました。今こうして研究者としての第一歩を踏み出す機会を頂けたことに、深く感謝申し上げます。

最後に、本論文の執筆と長い学生生活を暖かく支えてくれた家族に謝意を表すことをお許しいただきたい。